

# 国際文化情報学会

2019年12月7日@外濠校舎

## 国際文化情報学会実施要項

・ **開催日時**：2019年12月7日（土曜日）

12時40分～13時20分 学会総会

13時30分～17時10分 研究発表会

18時～20時 懇親会&表彰式

・ **場所**

総会・本部： S406

研究発表：外濠校舎各教室 4F ギャラリー

懇親会&表彰式：薩埵ホール

・ **学会総会議題**

1、2018年度会計報告

2、2019年度の学会運営方針

3、次年度以降の運営方針の変更について

4、その他

・ **懇親会&表彰式スケジュール**

1、学部長挨拶

2、乾杯、懇談

3、学部パンフレット表紙コンペ結果発表と表彰

4、FIC サロン(国際文化学部生対象就職セミナー § 懇親会)のお知らせ

5、学生審査員および学会発表者への連絡事項

6、学会各部門最優秀賞、奨励賞結果発表と表彰

・ **審査に当たる教員、院生、学生の皆さんへ**

審査用紙の受け取りと提出は S406 の学会本部で行ってください。質問等も本部へ問い合わせてください。

## 『異文化』編集委員からのお知らせ

最優秀賞および奨励賞受賞者の論文は、改稿の上『異文化』に掲載します。その際の字数は 12000 字以内とします。受賞者はフォーマットをダウンロードし、必要事項を記入の上、国際文化学部事務への提出が必要になります。パフォーマンスや映像作品に関しては、誌面に掲載可能な形態のものに限ります。

フォーマット・締め切り・提出先詳細等に関しては、決定し次第指導教員を含め受賞関係者にお知らせする予定です。

## 国際文化学会の教員審査の結果通知を希望する人へ

学会発表に対する教員審査員による評価を知りたい発表者は、下記の要領で「教員審査結果通知申請フォーム」より申請することができます。

- 1)申請は代表者(プログラムに書いてある方)が行ってください。
- 2)「教員審査結果通知申請フォーム」へのアクセスには大学付与の Google アカウントへのログインが必要です。
- 3)申込期限 12月13日(金)17:00まで(グーグルフォームにて)
- 4)結果は申込者に対し随時メールで通知いたします。
- 5)グループで発表を行った場合には、通知を受けた発表者がメンバーに共有してください。
- 6)「教員審査結果通知申請フォーム」の URL  
<https://forms.gle/FkiiQqvYWgzgQXr69>



## 研究発表会詳細

- (A)論文発表：質疑応答を含め 30 分。
- (B)ポスター発表：模造紙 1~6 枚まで。補助の机をボード前に設置可。審査の都合上、審査員対象に行うプレゼンテーションにかかる時間は 5 分以内、その開始時間の指定はできない。
- (C)映像作品：質疑応答を含め 30 分、ただし学部紹介ビデオ本編は 10 分以下。
- (D)インスタレーション・パフォーマンス：一教室を用いて 70 分。

## 審査

審査は学会当日の発表を見て、行う。論文の審査は学会当日の発表を見た教員二名、学生または院生審査員三名による採点(各 10 点満点)の合計によって、ポスター、映像作品、インスタレーション発表の審査はそれぞれ教員三名、学生または院生審査員四名の採点(各 10 点満点)の合計によって、最優秀賞 1 件、奨励賞 2 件を決定する。万が一、審査員に欠員が生じた場合は控えの審査員を派遣するが、事情によりそれができなかつた場合はその発表者の審査に当たった教員、学生審査員全員の評点の平均点を欠員分の評点として加点する。

審査ありの A,B,C,D の部門ごとに最優秀賞 1 件(現金 2 万円)、次点に奨励賞 2 件(現金 1 万円)を贈る。ただし、A 部門の論文発表については学部学生と院生の二部門に区分し、それぞれに賞を贈り、教員および外部参加者は除外する。同点で最優秀賞が 2 件以上、奨励賞が 3 件以上出た場合、教員の採点が高い順位で決定する。それでも差がつかない場合、同点の両者に該当の賞を与える。ただし、最優秀賞が 2 件でた場合、奨励賞は 1 件とする。応募が 3 件以下の場合是最優秀賞 1 件のみとする。受賞者に対して、点数を発表する。講評に関しては、学会終了後に発表者の要望に応じて、閲覧できるようにする。発表者から評価をめぐる疑義が生じた場合、企画広報委員会のなかに、審査調査委員会を立ち上げ、審査員に評価の確認を依頼し、審査が厳密に行われたかを調査する。

## 評価基準

発表の評価基準は以下に示す通りです。これを目安に審査員の責任において最終的な評点を出してください。審査用紙には講評欄を設けるので、その評価にいたった理由を書き込んでください。

### A 部門(論文)

- |                            |                                   |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか?   | 7. プレゼンテーションに説得力はあったか?            |
| 2. 発想に独創性や意外性があったか?        | 8. レジюмеや資料、パワーポインター、映像に不備はなかったか? |
| 3. 論理展開はしっかりしていたか?         | 9. 質疑に対して適切な回答が得られたか?             |
| 4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が示されていたか? | 10. 持ち時間を有効に使い、時間内に発表を終えたか?       |
| 5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか?      |                                   |
| 6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか?    |                                   |

### B 部門(ポスター)

- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| 1.テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか?    | 7.ポスターの表示や機材に不備はなかったか?    |
| 2.発想に独創性や意外性があったか?         | 8.ポスターの完成度は高かったか?         |
| 3.論理展開はしっかりしていたか?          | 9.口頭説明は規定時間内(5分以内)に終わったか? |
| 4.先行研究を踏まえ、引用や参照が明示されていたか? | 10.質疑に対して適切な回答が得られたか?     |
| 5.発表の仕方に工夫がこらされていたか?       |                           |
| 6.冗長や不足がなく適切に表現されていたか?     |                           |

### C 部門(映像)

- |                          |                                  |
|--------------------------|----------------------------------|
| 1.テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか?  | 6.音声は聞き取りやすかったか?                 |
| 2.ストーリー展開や論理展開に説得力はあったか? | 7.出典を明示するなど、映像や音楽の引用は適切に行われていたか? |
| 3.印象や記憶に残るフレーズやシーン       | 8.機材の操作に不備はなかったか?                |
| 4.手法に独創性や意外性があったか?       | 9.質疑に対して適切な回答が得られたか?             |
| 5.映像編集に工夫が見られたか?         | 10.持ち時間を有効に使い、時間内に               |

### D 部門 (インスタレーション)

- |                                   |                       |
|-----------------------------------|-----------------------|
| 1.テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか?           | 6.作品の完成度は満足のいくものだったか? |
| 2.発想に独創性や意外性があったか?                | 7.引用や参考資料は明示されていたか?   |
| 3.展示の仕方やパフォーマンスに工夫が凝らされていたか?      | 8.機材や装置の操作に不備はなかったか?  |
| 4.展示の仕方やパフォーマンスのエンターテイメント性は高かったか? | 9.口頭説明に説得力はあったか?      |
| 5.印象や記憶に残る要素があったか?                | 10.質疑に対して適切な回答が得られたか? |

評点の指標として以下を参照。

- |          |          |          |        |
|----------|----------|----------|--------|
| 10～9     | 8～7      | 6～4      | 3～1    |
| 優秀賞に値する。 | 奨励賞に値する。 | 可も不可もない。 | 劣っている。 |

## 制作補助

B 部門の発表については 1 万円、C,D 部門の発表については、3 万円までの制作費を実費で支給する。

制作にかかった費用のリストに宛名を代表者にした領収証を添えて、12 月 13 日(金) 17 時までに国際文化学部窓口へ提出すれば、企画広報委員が審査し、妥当と思われる金額を支給する。(以下、詳細 URL)

[https://hosei.study.jp/ic/class/gakkai\\_hojo](https://hosei.study.jp/ic/class/gakkai_hojo)



審査員配置一覧

A.論文部門 (13:30~16:55)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員
S301	重定ゼミ 高橋	衣笠ゼミ 阿部	衣笠ゼミ 村井	日暮	内山	竹内
S302	島野ゼミ 飯嶋	曾ゼミ 渥美	曾ゼミ 澤野	佐々木直美 吉澤	江村	北
S303	甲ゼミ 佐藤	甲ゼミ 池谷	甲ゼミ 松浦	熊田ゼミ 藤田	深谷	久木
S304	稲垣ゼミ 佐野	佐々木一 飯田	佐々木一 伊原木	島田ゼミ 伊藤	宇治谷	曾
S404	榎木ゼミ 上東野	中山ゼミ 定兼	中山ゼミ 中村	榎木ゼミ 馬場	岩川	甲
S306 (大学院生)	大西ゼミ 落合	尹	金	湯	松本	渡辺

B.ポスター部門(13:30~17:00)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
外濠4階 ギャラリー	栗飯原ゼミ 松林	栗飯原ゼミ 古谷	栗飯原ゼミ 井ノ原	鈴木靖ゼミ 黒岩	鈴木靖ゼミ 長田	森村	重定	栗飯原	佐藤(千) (重定ゼミ審査)

※佐藤(千)審査員は、重定ゼミの審査に重定審査員の代わりに当たる。

C.映像部門(14:30~16:10)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
S407	興石ゼミ 小林	松本ゼミ 斎藤	松本ゼミ 秋庭	中島ゼミ 中澤	中島ゼミ 濱田	大中	林	佐々木(一)

D.インスタレーション部門(13:50~17:10)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
S201,202,203,401・ S204,403	興石ゼミ 鷺坂	種田ゼミ 新井	島田ゼミ 飛田	種田ゼミ 鈴木	興石ゼミ 今井	島野	興石	遠藤

予備審査員：稲垣、廣松、鈴木正道、島田、前川、榎木、ジョルデイ、大嶋

発表者・発表団体一覧

A.論文

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
S301	13:30~14:00	現代社会における国際文化交流の可能性	近藤千晴	9
	14:05~14:35	特定の国・地域への関心が敵国研究に変わる時 ーロシア/ソ連軍に利用された知日・親日家個人の記録からー	杉江千紘	10
	14:40~15:10	前期中等英語教育研究ー日本人が学ぶべき「ことば」とはー	鷺坂晃太	11
	15:15~15:45	コンピュータ黎明期の日本における技術の受容と発展 ーIBMジャパンの日本化路線を中心としてー	林琳	12
	15:50~16:20	日本語母語話者の英語学習 音声的特徴から「伝わる英語」を考える	高津麗	13
S302	13:30~14:00	非英語圏の人々が英語を学ぶこと	今井愛莉	14
	14:05~14:35	日本における神智学としてのヨガの歴史ー竜王会の活動を通してー	本橋陽介	14
	14:40~15:10	現代日本における通過儀礼 ー新たな儀礼形態としての離婚式・生前葬からー	丸山京	15
	15:15~15:45	時代を生き抜くホテルー変えない戦略が生み出す価値ー	増田亜未	17
	15:50~16:20	Malaysia's Bumiputera Policy and Brain Drain: A Case Study of Malaysia Chinese Studying in Japan マレーシアにおけるブミプトラ政策と頭脳流出：日本に留学している中国系マレーシア人の事例から考察	Tee Kien Shun	18
16:25~16:55	文学書評	上田悠	19	
S303	13:30~14:00	産児調節の歴史から見る優生思想ー日本鋼管における家族計画を事例にー	生田千尋	19
	14:05~14:35	デンマーク領グリーンランドにとってのデンマーク化	長澤 穂乃花	20
	14:40~15:10	“ピクチャレスクな旅”「バックグラウンドツアー」の展開 京都市東山区二年坂・三年坂における「アンノン族」と「きもの女子」の比較から	志賀美南	21
	15:15~15:45	地域の課題を乗り越えた特区民泊 ー小さくゆっくり始めた東京都大田区の3年間ー	富田駿	23
	15:50~16:20	高度経済成長期の川口市地域産業における女性労働	小林寛子	24
	16:25~16:55	食品の移動が作り出す人と人とのつながりーフードバンクかながわを事例にー	倉澤花歩	25
S304	13:30~14:00	日本におけるフィリピン系ニューカマー第二世代児童の生活環境と教育問題	河原裕子	26
	14:05~14:35	Accents of English	小林恵梨奈	27
	14:40~15:10	なぜボランティアを続けるのかー外国人収容所に通う3名のライフストーリーからー	田代奈穂子	28
	15:15~15:45	義務教育後の外国人生徒の学力向上と進路選択支援ー東京都立大田桜台高校の事例からー	友利サイナ	29
	15:50~16:20	中国におけるリメイクドラマの放送に関する研究ー日中リメイク作品の比較分析を中心にー	周翠彦	30
	16:25~16:55	女子の種目であったダンス教育の歴史ー伊澤修二・成瀬仁蔵の思想から見る背景ー	岩田真里奈	31
S404	13:30~14:00	なぜスラムと呼ばれるのかー国際協力における呼称の働きー	小嶋鈴乃	33
	14:05~14:35	役割期待の変遷とギャップ ー日本人学校の帰国生徒の事例からー	清水菜歩	34
	14:40~15:10	日本語ボランティア養成講座における人材育成ー千葉県市川市を事例にー	内山舜介	35
	15:15~15:45	「『最貧国』が見えにくくするものー小学校中退者と乳幼児の死亡者がいないラオスの村ー」	村田知哉	36
	15:50~16:20	虐殺と呼ばれるまでのプロセスーカンボジアでの大量殺戮をめぐる日本政府の言説の変化ー	北井寛人	37
	16:25~16:55	日中ネット記事/世論における「精日」の言説：現在の「親日」のー形態について	加藤光	38
S306	13:30~14:00	尹東柱の作品を通じた文化交流ー日本の尹東柱記念活動を中心に	尹孝貞	39
	14:05~14:35	アイダ・B・ウェルズとニグロ・フェローシップ・リーグから見る 革新主義期シカゴの人種とジェンダー（仮）	岡本美貴	40
	14:40~15:10	映画監督アナス・トマス・イェンセンの作家性ー『アダムズ・アップル』の映画分析を中心にー	米澤麻美	41
	15:15~15:45	グローバル化時代における地域文化の復活に関する研究 ー上海市華浜鎮の黄道婆文化のブランド化の動きを事例にー	魏玉清	42
	15:50~16:20	現代満族のエスニシティに関する研究ー河北省承德における「文化復興活動」を中心にー	魏雪帥	43
	16:25~16:55	朝鮮時代漢陽のシティプランニング」の世界遺産登録の可能性と課題	金瑞蘭	45



B.ポスター

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外壕4階ギャラリー	13:30~15:00	プログラミング × エンターテインメント ーAIアルゴリズム・ゲーム制作・センサーカメラの研究を通してー	高橋航平 (重定ゼミ)	46
		森林破壊によるゾウと人間との衝突 ～エコツーリズムの可能性～	中澤一輝 (中島ゼミ)	47
		スポーツから見る東亜新秩序・極東選手権大会を事例に-	飯田祐希子 (佐々木一ゼミ)	48
	15:30~17:00	外国につながる児童への実践ー横浜市立潮田小学校の取り組みからー	中村綜 (中山・今泉ゼミ)	49
		現代建築の巨匠、大江宏と現在に通じる建築観について	新井亮太 (種田・岡村ゼミ)	50
		人々に寄り添う道	江口鈴奈 (甲ゼミ)	51

C.映像

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
S407	14:30~15:00	擬音語世界-音の収集と再構築-	御厨智也 (稲垣ゼミ)	53
	15:10~15:40	僕は今、水を無駄遣いしている。現代美術パフォーマンスの実践と記録	杉浦亜門 (稲垣ゼミ)	54
	15:50~16:10	“私たちは日本人だ”台湾人元日本兵の終わらない戦い	長田百花 (鈴木ゼミ)	55

D.インスタレーション

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
S201	13:50~15:00	人間の住む海	高継嘉 (衣笠ゼミ)	57
	16:00~17:10	海外から見た日本人と日本人から見た日本人	正岡由衣 (衣笠ゼミ)	58
S202	13:50~15:00	明日が最期なら何をしますか ～「平和」に生きる私たち～	山口彩奈 (佐々木直ゼミ)	59
	16:00~17:10	嘘と真実	西野佳奈 (桐谷・熊田ゼミ)	60
S203	13:50~15:00	パーソナル「香」診断 ーストレス社会で生きる私たちへー	黒田悠歌(甲ゼミ)	61
	16:00~17:10	男らしさ・女らしさはどこから来るのか	浜野愛子 (岩川ゼミ)	62
S204	16:00~17:10	アートユニット「Sulata vesij」によるアートプロジェクトの再現制作	金原あかり (稲垣ゼミ)	63
S401	13:50~15:00	「太陽の楽園」ソーシャル・エンゲージド・アートに関する研究成果としてのインスタレーションの試作	山本葉月 (稲垣ゼミ)	64
	16:00~17:10	ジェスチャー制御による音響と映像を組み合わせたメディアアート制作	園海人 (大嶋ゼミ)	65
S403	16:00~17:10	希望船～アフリカの声をのせて～	奥山香帆 (栗飯原ゼミ)	67

## A.論文

発表者：近藤千晴

所属ゼミ：桐谷・熊田ゼミ

タイトル：現代社会における国際文化交流の可能性

発表概要：日韓のとある小学生サッカーチームが毎年交流を行っていたが、日韓関係の悪化により今年はそれが中止となり、両国チームの小学生らとその保護者が残念がっているというニュースを耳にした。昨今、日韓関係悪化に関連する報道が頻繁になされているが、個人的にはそのニュースが特に深く印象に残っている。なぜなら、スポーツも一種の文化交流と考えると、政治が本来踏み入れるべきでない文化の領域に入り込み、人々の人間的な活動を阻害していると感じたからである。政治的事情、そして、そこから生まれる人々への先入観や偏見に雁字搦めとなり、大切な機会を失うことはあってはならない。

本発表では、国境を越えた文化交流の持つ可能性と、その可能性を活かすために私たちがすべきこと、できることは何かを考察する。人々の幸福な生活のために政治があるのであって、決して政治のために人々の生活があるわけではない。したがって、国境を越えたつながりを持ち、交流することが幸福であるとするならば、そこに政治が絡むべきではない。

また、政治とは異なるカテゴリーにある文化だからこそ持つ可能性、

すなわち、文化ならではの良さは殺すべきではない。国同士の関係が悪い時こそ、個々の交流、民間レベルの交流が大きな意味を持つのではないか。個々の交流とは、共通の言語を介した直接的な交流だけを指すのではない。他国の文化、例えば、スポーツ、音楽、映画、アニメ、漫画、演劇、ダンス、アート、食などをきっかけに興味を持ち、もっと知りたいと思う。そして、もっとよく知り、理解するために、原語を勉強してみたり、実際に現地へ足を運んでみたりといった行動に発展する。このように、さまざまな人間活動に触れて、興味を持つ、そして、それが自らの生活の一部へと組み込まれていく。それだけで十分なのではないかと思う。むしろ、この工程が、一時的な国際交流イベント的なものより、真の国際交流といえると考えられる。国家レベルでの政治的交流が難しいときこそ、民間レベルから底上げする形での文化的交流が意味を持ち、平和につながるのではないか。

参考文献：・金恵媛、横山睦美「『外交青書』からみる日韓文化交流の歩み」『山口県立大学大学院論集第9号』山口県立大学、2008年

・大木裕子「戦後日本の芸術分野における国際文化交流」『文化経済学第3巻第2号』文化経済学会、2002年

・内田真理子「現代日本の国際文化交流に関する考察」『文化経済学第5巻第2号』文化経済学会、2006年

・文化庁『新しい文化立国の創造を

めざして：文化庁 30 年史』ぎょうせい、1999 年

・青柳まちこ『文化交流学への招待』新典社、1999 年

・A.D.キング『文化とグローバル化』山中弘他訳、玉川大学出版部、1999 年

・榎泰邦『文化交流の時代へ』丸善、1999 年

・J.M.ミッチェル『文化の国際関係』田中俊郎訳、三嶺書房、1990 年

発表者：杉江千紘

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：特定の国・地域への関心が敵国研究に変わる時—ロシア／ソ連軍に利用された知日・親日家個人の記録から—

発表概要：16 世紀から現在までのロシア／ソ連のスパイに関して日本語で書かれた、もしくは日本語に翻訳された米国などの先行研究は主に、特殊学校で教育を受け、愛国心や自身の利益のためにスパイ活動をした人物や情報機関に着目してきた（例えば、ハットン 1962）。本研究は、ロシア人宣教師ニコライが 1874 年に日露友好の輪をつくるために東京に設立したものの、結果的にスパイ養成の役割を果たしたともいえる正教神学校に着目する。先行研究では悪名高く狡猾な行為と表現されているスパイ活動が、ロシアではどのように描かれているのかを追いかけた。正教神学校には 20 世紀初めに 20 名以上のロシア人が来日し、約 5 年間

日本人学生と共に学んだ。1917 年のロシア革命を機に日露関係が悪化するとソ連軍は彼らにスパイ活動を強要した。だが彼らの中には特別な訓練は受けておらず、日本の言語や文化に興味を持ち高度な教育を受けるために来日したごく普通の学生も含まれていた。スパイ活動に取り組んだロシア人学生の軌跡を辿り、彼らがロシアでどのように議論されてきたのかを見ることで「約 100 年前に日本で学んだロシア人留学生は現在ロシアではどのような存在として捉えられているのか。一方で、目が向けられなくなった側面は何か」という問いに答える。

調査はロシア語で書かれた正教神学校とロシア人卒業生に関わる計 17 の資料を確認した。最も詳細な Ку л а н о в (2014) からロシア人卒業生個人の活動を辿ると、スパイ活動を担った複数のロシア人は日本の言語や文化に興味を持ち続け日本を憎んではいなかった。そのため、スパイ活動を望まず靴の売買や語学を教えるなど別の道で生計を立てようとした者や、モスクワで親日思想を教えようと試みた者もいた。しかしソ連軍への忠誠心を示さねば射殺される状況下で、日本の軍事力や政治を分析して報告するスパイ活動に取り組まざるを得なかった。正教神学校に関する上述の 17 のロシア語資料の内 5 本はロシア人卒業生がスパイとして利用されたことを記録している。一方で残りの 12 本は一部の卒業生が小説の翻訳など日露交流に貢献したことに着目しており、学校を

文化的交流の場として位置付けていた。全体としてロシア語の資料ではロシア人留学生は日露交流の懸け橋として描かれており、スパイ活動を強要された存在としての側面は日露双方であまり目が向けられていなかった。

本研究は、日本への敵意や狡猾さではなく文化や言語への関心が始めにあり、後にスパイ活動を強要された人々を扱った。スパイにはなる気はなかった人々の歴史を辿ることで、ロシア／ソ連への印象を戦争の歴史で埋めたり無関心で終わらせたりすることなくいられるのではないか。

J.B.ハットン (1962) 『スパイ』川島広守訳、日刊労働通信社。

Ку л а н о в А.Е. В т е н и  
В о с х о д я щ е г о  
с о л н ц а.М.,2014.

発表者：鷺坂晃太

所属ゼミ：輿石ゼミ

タイトル：前期中等英語教育研究—日本人が学ぶべき「ことば」とは—

発表概要：第 1 章 日本の英語教育を知る

1.1 小学生を対象とする英語教科化政策

1.2 文部科学省が繰り返してきたモデルの変遷

1.3 本研究の問い

序章では、日本が今まで歩んできた英語教育の道のりを振り返る。

2002 年に「英語が使える日本人」育成のための構想戦略が練られてから早 18 年が経過し、グローバル対応への政策が後を絶たずに施行されてきた。つい最近では、2020 年度から小学 3 年生から英語が外国語活動と称

し開始、5 年生からは英語が教科として必修化されるが、果たして本政策は日本人の英語能力向上に貢献できるのだろうか、目に見える課題と照らし合わせながら本稿のテーマとしてあげ問う。

第 2 章 現代の英語教育から見える課題

2.1 「学生」と「政策」の目標到達点の差異

2.2 他国と比べる教員育成時間

2.3 日本語学習の過多

本章では、主に近年の英語教育にはどんな問題があるのかを明らかにしそれを課題とする。学生のゴールは世界で通用する英語ではなく、試験に合格するための英語であり、これが一致しない限り英語力は停滞するに違いない。2.2 では、英語科に特化していない小学校教諭に正しい英語は教えられないという難点をフランスの教員育成に習って克服できないかその解決策を挙げる。最後に日本語学習、いわゆる国語という教科にどれだけ多くの時間を要しているか、近未来に必要なのは必要以上の漢字の知識や古典の知識ではなく英語であるということを指摘する。

第 3 章 「ことば」の教育としての英語

3.1 早期教育でやるべきこと

### 3.2 国民性と教育方法

#### 3.3 「伝える」ためのチャレンジ

次に考えることは、英語をひとつの「ことば」として学習するためには、初期学習において何を身に着けるべきかということ。初期段階にて英語でコミュニケーションをとることに楽しさを覚えられなければ、第二言語としての英語で能動的な学びに終止符が打たれてしまう。そのような結果にならないためには「伝える」ことが人の心を動かし自分の学びの原動力となるその相互関係を理解する必要がある。その中で特に大事にしたいのが「音」と「自信」である。多くの言語研究者は、早期教育をすることでスピーキング（発音）とリスニング（音を拾うこと）分野において成果が出ることを研究結果として挙げているため、文法や語彙はさておき、日本語にない多くの音の習得が必要だと考える。

#### 第4章 グローバルな世界で戦うためには

##### 4.1 結論

##### 4.2 本研究の限界

終章では、1～3章で論じてきたことをまとめ考察し、自分なりの結論を出す。最初の問いに対する解は、この現状のままの小学生英語教科化は意味をなさない、とする。この政策で実績を上げるには、これまで述べてきたように教育者の育成や教科カリキュラムの見直しが必要不可欠であり、「ことば」の教育について再認識する必要があると主張する。

発表者：林琳

所属ゼミ：中島ゼミ

タイトル：コンピュータ黎明期の日本における技術の受容と発—IBM ジャパンの日本化路線を中心として—

発表概要：コンピュータ黎明期の日本で、電子管製造技術、利用技術未成熟という問題で、日本独自のコンピュータの研究開発はスムーズではなかった。日本通産省（当時）がIBM に対し、日本メーカー3社と合弁会社の設立を提案したがIBM に拒否された。日本独自コンピュータの研究開発は困難であったので、日本政府は先進国アメリカの技術を利用しようとするのである。その後、IBM と日本通産省の間に激しいやり取りがあり、IBM が強硬な態度を変え、日本IBM とIBM の技術提携を認める前提としてIBM と日本メーカー8社（東芝は8社中の1社）のクロスライセンス契約した。

70年代入ると、日本IBM のユーザーであった東芝は世界初の日本語ワードプロセッサ—JW-10 を論文発表した。欧米では26個アルファベットのみで文章を簡単に打てる。かなを一瞬にして漢字に換え、英文タイプを打つ感覚で手軽にタイプできるJW-10 はカナ漢字変換システムを使い、とても人気な商品であった。しかし、東芝は世界で初めて漢字システム開発した会社ではない。1970年、日本IBM が世界に先駆けて漢字システムを研究開発したのである。そして、1970年の大阪の万国博覧会にデ

モ用として出展し、1972年に正式発表された。万国博覧会出展に際して、日本経済新聞に1967年10月1日と同月12日の2回にわたって記事が掲載された。日本IBMが出展することと世界初の漢字システムの開発は日本社会に注目を集めた。

ところで、IBMがコンピュータハードウェアの会社と認められているのに、なぜ子会社日本IBMはソフトウェア部門の開発を目指したのか。文化の差異は多国籍企業の経営の中で非常に考慮されるべき要素である。日本IBMが外資系企業であるにもかかわらず世界に先駆けて漢字システムを開発することができたのか。そして、漢字かな変換システムの普及については東芝に先を越された。東芝の漢字仮名変換システムより日本IBMが研究開発した漢字システムの欠点はどこであろうか。

---

発表者：高津麗

所属ゼミ：興石ゼミ

タイトル：日本語母語話者の英語学習 音声的特徴から「伝わる英語」を考える

発表概要：本発表では、「日本人なまり」とも言われる日本語母語話者の英語学習について、発音面の改善点を提示したい。まずは日本語と英語の持つ音声的特徴の差を、文から語への順に考察する。これは、

個々の単音の発音が少々間違っている、文脈や文としてのリズムが正しければコミュニケーションが取れるという寺島(2000)の考え方に基づいており(注1)、top to bottomの方法で考察したいからである。英語と日本語の音声面における最大の違いは、文単位で見たときのリズムの差にあり、英語はStress-timed rhythm(強勢拍のリズム)であるのに対し日本語はSyllable-timed rhythm(音節拍のリズム)なのである。日本語のリズムを英語に応用してしまうと、「聞き取りにくい」英語になってしまう。リズムの他に、イントネーションやピッチ、音節、音素の項目においても大きな違いが見られる。

次に、改善を試みる前にどのような英語を目指すべきかを考える。ここで、必ずしも“ネイティブスピーカー”の発音ではなく、相手に伝わる英語を目指すことと割り切ってしまうことが重要だといえるCrystal(2003)によると、現在、英語非母語話者は5億人~10億人であり、英語母語話者の3億2000万~3億8000万人よりもはるかに多い(注2)。共通語として英語を使用する機会が多いため、小さな発音の間違いはあまり問題ではない。最低限話している語句を聞き取ってもらうことと、話の意味を理解してもらうことを第一とする。

それでは、日本語母語話者が、相手が理解できる英語を話すための改善点として、以下の点を挙げたい。

- ・文：イントネーションは、聞き手が意味の区切りを認識するのに重

要である。音調群の中から核となる語を意識し、一息で一つの語のように言う(注3)。

・句：単語が連続すると、英語のリズムを作るために弱化・脱落・同化・連結の四つの「化学変化」が起こると寺島(2000)はいう(注4)。一字一句文字通りに読むのではなく、様々な変化のパターンを理解する。

・音素：母音を一つ一つ正すよりも子音の発音の仕方を意識する方が効果的だと考えられる。これは、英語の発音は子音が8割を占めている(注5)ことに起因する。英語の単語は閉音節であるため、単語の末尾に母音を入れないことや、有声開始時間(VOT)の差を理解し、呼吸を強く使い発音することが効果的であるといえる。

これからの英語教育においては、単語や音素といった小さい部分にこだわりすぎるのではなく、コミュニケーションをとるための、意味を重視した音声面の内容が必要であると思われる。

#### 参考文献

(注1) 寺島隆吉,2000,『英語にとって「音声」とは何か?』,あすなろ社, pp.10-11

(注2) David Crystal,2003, English as a global Language (second edition), Cambridge university press, p.61

(注3) 渡辺和幸,1994,『英語のリズム・イントネーションの指導』,大修館書店, p.19

(注4) 寺島隆吉,2000,『英語にとって「音声」とは何か?』,あすなろ社, p.26

(注5) 藤澤慶已,2014,『オドロキモノキ英語発音 子音がキマればうまくいく』,ジャパンタイムズ, p11

---

発表者：今井愛莉

所属ゼミ：興石ゼミ

タイトル：非英語圏の人々が英語を学ぶこと

発表概要：SAを通じて、日本人も含めた非英語圏の人々が世界共通語としての英語を学ぶことについて興味を持った。そして「英語を使いこなす」基準はどこにあるのか、それぞれの非英語圏の人々がどう学べば英語が習得できるのか、各国によって学び方が違うと考え、それぞれの国に合った学習法があるかなどを考える。

---

発表者：本橋陽介

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：日本における神智学としてのヨガの歴史－竜王会の活動を通して－

発表概要：昨今、街中や電車でよくヨガ教室の広告や看板を見かけるように、ヨガはリラクゼーションやフィットネスの場として日本で人気を博している。この現代のヨガブー

ムの源流となったのは 19 世紀にエレナ・P・ブラヴァツキーが提唱した近代神智学の影響を受けた 20 世紀後半のニューエイジの流れにあった（伊藤雅之 2011 年）ニューエイジとは西洋至上主義的な資本主義経済と競争社会に疲れた若者によるカウンターカルチャーであり、東洋の神秘主義に救いを求めた人々により 1960 年代以降ヨガは世界中へと広がっていた（島崎 1996 年）

日本におけるヨガについては、1960 年代～1970 年代に西洋から起こったニューエイジの潮流が日本に入り込んだ結果巻き起こった第一次ブーム、1980 年代～1990 年代にエアロビクスに対抗するゆるやかなエクササイズとしてヨガが注目された第二次ブーム、その後オウム真理教による「地下鉄サリン事件」を代表とする一連の事件により一時ヨガは敬遠されたが、女性をヨガの実践の主体とし、スピリチュアルな側面を持つフィットネスとして第三次ヨガブームを迎えている（入江恵子 2015 年）

しかし、こうしたニューエイジに端を発するヨガブーム以前にも、ヨガの普及活動はあった。その一つが、戦後期に神智学に則った「総合ヨガ」を日本に普及しようとした竜王会による活動であった。竜王会は 1964 年に三浦関造によって創設された団体で、ヨガを方法論として神智学理論の実践を行うことにより、敗戦後日本人の打ちひしがれた心を治すことを目的とされた（岩間 2016 年）三浦関造の神智思想に関しては

、吉永進一が三浦に影響を与えた神智学者の教説を紹介しながら考察している。また、岩間浩が三浦の関係者の証言を交えながら自伝的考察を行っている。しかし、現在竜王会の活動に注目した研究はない。そこで、本発表では竜王会の月報『至上我の光』（1954 年～1960 年）から竜王会の活動を見ることで、竜王会が日本においてどのような影響を与えたかを考察する。

#### 参考文献

- ・伊藤雅之 「現代ヨーガの系譜：スピリチュアリティ文化との融合に着目して」 『宗教研究』84 巻 4 号 2011 年
  - ・入江恵子 「女性化されるヨガ：日本におけるブームとその変遷」 『スポーツとジェンダーの研究』2015 年
  - ・岩間浩 『総合ヨガ創始者 三浦関造の生涯』 竜王文庫 2016 年
  - ・島藺進 『精神世界の行方 現代世界と新霊性運動』東京堂出版 1996 年
  - ・吉永進一 「近代日本における神智学思想の歴史」 『宗教研究』84 巻 2 輯 2010 年
  - ・機関誌 『至上我の光』（1954 年～1960 年）合本 竜王文庫 1972 年
- キーワード：神智学 ヨガ 竜王会

---

発表者：丸山京



所属ゼミ：佐々木一ゼミ

タイトル：現代日本における通過儀礼 —新たな儀礼形態としての離婚式・生前葬から—

発表概要：日本においては、今でもいろいろな機会に様々な儀礼を行っている。正月、節分、お彼岸、お盆、クリスマスといった年中行事に加え、初宮、七五三、成人式、結婚式、葬儀のような、人間の一生の節目ごとにおいて行われる通過儀礼が代表的なものである。

今日、こうした儀礼文化に変化が起きている。柳田國男監修の『民俗学辞典』に記載されている「年中行事」の項目には、「『家族や村落・民族など、とにかく或る集団ごとにしきたりとして共通に営まれるもの』という一節が含まれている」とある（石井、2005）。このように、年中行事には集団による儀礼の執行に対する規制力・拘束力が見られ、こうした強制力は、年中行事だけでなく通過儀礼においても作用していた（石井、2005）。しかし、地域社会の紐帯が弱まり、「家」の継承さえ困難になった現在、儀礼は集団の拘束力から解放されることになり、個人や家族が従来の伝統から離れて、新しい儀礼や生き方を選択することを可能にさせ、多様性を示すようになっていく。また、結婚するかしないか、離婚を選ぶのか、このような人生のあり方も同じように個人に委ねられ、多様性という言葉によって特徴づけられる。

厚生労働省が発表した 2018 年の人

口動態統計によると、出生数は 92 万 1000 人と統計開始以降最少であり、死亡数は 136 万 9000 人で戦後最多であった。このように、日本はまさに少子高齢社会であり、家族のかたちに変容しつつある中で、急増しているのが「単身世帯」である。その増加の理由のひとつには「離婚の増加」が挙げられ（瀧野、2018）、同統計によると婚姻件数は 59 万組、離婚件数は 20 万 7000 組であり、およそ 3 組に 1 組が離婚をする時代とも言われる。

そのなかで近年、冠婚葬祭の婚にあたる「結婚」を人生の節目としてとらえるように、「離婚」を新たに節目ととらえた「離婚式」が、また、葬にあたる「葬儀」を本人の生前に行うことで人生の節目とする「生前葬」が新たな儀礼形態として見られるようになった。離婚式とは、離婚する（した）夫婦が親族や友人たちの前で「再出発の決意」を誓い合う式のことである。また、生前葬とは、本人の生前に模擬的に行う葬儀のことである。

そこで本論では、まずは日本における結婚・離婚と葬送の変遷をそれぞれ追いながら、離婚、葬儀に対する意識や考え方の変化とその理由を時代背景とともに明らかにしていく。そして、離婚・生前の葬儀が結婚・葬儀と同じように、人間の一生の節目である通過儀礼として捉えられる面があるのではないかと考え、「離婚式」「生前葬」をファン・ヘネップの『通過儀礼』の三段階構造理論から分析し、現代日本における離

婚・生前の葬儀の通過儀礼化について考察する。

参考文献

石井研士「日本人の一年と一生 変わりゆく日本人の心性」春秋社、2005年。

瀧野隆浩「これからの『葬儀』の話しよう」毎日新聞出版、2018年

---

発表者：増田亜未

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：時代を生き抜くホテル—変えない戦略が生み出す価値—

発表概要：日本のホテルの歴史は、明治期に外賓を接遇するための洋式宿泊施設から始まった。この頃誕生したホテルの中には、現在観光資源になっているホテルが存在する。そうしたホテルを、本研究では日本クラシックホテルの会に加盟し、経済産業省の近代化産業遺産に認定されていることと定義した。このようなホテルは、第二次世界大戦時または以前に創業し現在まで営業を続けており、創業時の経営指針や建物が今でも残っている。つまり、古いものを現在に至るまで維持していることが重要となっている。

一方で、ホテルは営利企業であり、古いものを維持するよりは社会の変化に合わせて利益を上げることが必要である。先行研究では、老舗企業は創業時からの販売方法や商品・サービスなどを変化させて経営を続け

てきたといわれている（横澤 2012）。ホテルの商品である建物や内外の設備（佐古 2002）もまた、時代と共に変化が求められ、古いものを維持することは難しい。しかし、本研究で対象とする箱根宮之下の富士屋ホテルは、創業時からの建物を現在まで維持しながら 141 年ものあいだ営業を続けている。以上から、問いは「100 年以上の経済・社会変化に対して、どのようにして富士屋ホテルは古い建物を維持してきたのか」である。本研究の定義に合致するホテルの中で最も創業が古く、独自入手した資料もあることから富士屋ホテルを対象とし、ホテル史の文献調査及びインタビュー調査を行った。結論は以下の通りである。

明治 11 年の創業当初は、外国人専門ホテルと称しながらも十分な洋式設備でなかったが、徐々に設備改善を施し、外国人客を意識して和洋折衷の建物を建設した。その中でホテル建築の外観にこだわるのは、利益をあげて営業を続けるための施策であった。明治 40 年以降は経済情勢の変化から、日本人客も受け入れるホテルへと変化して経営を続ける中で、建設した建物には内外に装飾が施され建物へのこだわりがみられる。昭和 41 年に運営主体が変わった時、すでに築 80 年以上経っていた建築物も、老朽化の問題で取り壊されることはなかった。創業者たちがそこに込めた思いや歴史に価値を見出し、改修工事などを施して外観を大きく変化させることなく維持してきた。富士屋ホテルは時代ごとにホテル建

築に徐々に価値を見出したことが、建物の維持につながった。

これらの歴史ある建築群は現在ホテルの売りになっている。利益を求め企業にとって古いものを維持することは容易ではないが、のちにそれが利益を生み出す可能性がある。それを信じて、変えない戦略をとることも企業が生き抜く生存戦略になりうるのではないか。

佐古義貞 (2002) 『ホテル事業論：事業化計画・固定投資戦略論』柴田書店。

横澤利昌 (2012) 『老舗企業の研究改訂新版』生産性出版。

---

発表者：Tee Kien Shun

所属ゼミ：中島ゼミ

タイトル：Malaysia's Bumiputera Policy and Brain Drain: A Case Study of Malaysia Chinese Studying in Japan マレーシアにおけるブミプトラ政策と頭脳流出：日本に留学している中国系マレーシア人の事例から考察

発表概要：マレーシアにおけるブミプトラ政策と頭脳流出：日本に留学している中国系マレーシア人の事例から考察 (仮)

Malaysia's Bumiputera Policy and Brain Drain: A Case Study of Malaysian Chinese Studying in Japan

主査：中島成久 先生 副査：浅川希洋志 先生

修士二年 Tee Kien Shun

### 1. 研究概要

本研究では、マレーシアの中国系に対するブミプトラ政策の影響要因を調査する。特に、中国系コミュニティにおける教育問題に焦点を当てたい。独立以来、国民のグローバル化に対応する競争力を高めるために国民の高等教育へのアクセスが長期的計画となっている。1969年の人種暴動事件の後、政府は三大民族間の大きな社会経済的格差 (SES) を解消するために「1970 新経済政策 (New Economic Policy, NEP)」を実施した。その結果、国立大学入学時の公平性を確保するために、民族割当制度 (クォータ制) が導入された。クォータ制度は、大学に入学する機会を増やすために、多数民族のブミプトラ系に与えられた。

2002年には、この民族的クォータ制度は廃止され、大学入学は、実力に基づくこと (Meritocracy system) になった。しかし、胡 (2004) によって、クォータ制が廃止されても、非ブミプトラ系 (特に中国系) の入学率が増加していないことが明らかにされている。

2019年5月、ブミプトラ系を優先する大学入学のクォータ制度を保持するという政策がマレーシア教育部によって公表された。(Channel News Asia, 2019) 国立大学の入学定員の数を 25,000 から 40,000 に増やしたが、入学クォータ制度の割合は 90:10 を維持する。クォータ制度がマレーシアにおける頭脳流出を助長する傾向があると指摘された。(The

Star Online, 2019)

## 2. 研究目的

本研究の目的は、ブミプトラ政策が実施されて以来、中国系の教育に与えた影響を明らかにすることである。また、ブミプトラ政策のかげで頭脳流出しているマレーシア人中国系について考察する。先行研究は、クオータ制度廃止されても、中国系は国立大学に入学する際に依然として困難に直面しており、これがマレーシア人中国系の頭脳流出を助長していると主張している。しかし、頭脳流出の原因はブミプトラ政策の不平等だけではないことを証明する。また、本研究を経て、頭脳流出の要因を考察する。

ないため大学生の私の視点から気軽に紹介できたらと思い選びました。石田衣良さんの『逝年』は私、個人が好きな作品でもあり LGBT や出張ホストのような新しい価値観が書かれていること、今の現代社会と類似していると感じたため皆さんにもぜひ知ってもらいたいと思いました。住野よるさんの『君の臍臓を食べたい』は誰もが知っている大ベストセラー作品ですが反対に批判的な目で紹介してみようと思います。発表方法はビブリオバトルのように主観的に方法にはなってしまいますが、見に来てくださったみなさんに少しでも読んでもらいたいと思っていただけるように取り組みます。残りの二作品も興味深いものにしようと思っています。

発表者：上田悠

所属ゼミ：島田ゼミ

タイトル：文学書評

発表概要：私が今まで読んだ小説の中で個人的に気に入ったもの、紹介したいものを主観的に発表したいと思います。予定している作品は、島本理生さんの『ファーストラブ』石田衣良さんの『逝年』住野よるさんの『君の臍臓を食べたい』の三点ともう二作品くらい同じ視点の異なるテイストで発表したいと思います。島本理生さんの『ファーストラブ』は直木賞を受賞するほど文学的にも評価されている作品ですが、本離れをしている学生が多い傾向にあるのか、周りで読んでる友人・知人がい

発表者：生田千尋

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：産児調節の歴史から見る優生思想—日本鋼管における家族計画を事例に—

発表概要：日本における優生思想の歴史は、専ら優生法との関連に重きを置いて語られることが多かった(e.g.松原 1997、園井 2004)。今年 5 月の旧優生保護法(1948-1996)の違憲性が争われた訴訟判決でも、同法が長期にわたって存続していた事実が優生思想を浸透させ、社会に根強く残る結果になったとの見解が示された。しかし、法に全ての原因を帰す

には無理があるであろう。人々に優生思想を受容させていくには、生活に密着した取り組みが必要であったと思われる。

そこで、発表者が着眼したのが日本における優生思想の普及に深く関与した産児調節運動である。産児調節運動とはアメリカのマーガレット・サンガーが始めた運動で、優生学と同時期の1920年代に日本に伝わった。当初、避妊を巡っては逆淘汰や人口減少に対する恐れから是非が分かれたが、「遺伝病の恐れがある者」などの「社会不適合者」への避妊は認める論調が多かった。このように、産児調節運動は優生思想を包含していたのである(荻野 2008)。

このことは、旧優生保護法を立案したのが、戦後の社会不安定を背景に力をつけて政界入りした産児調節運動家だったことからも見取れる。「社会不適合者」の対象を非遺伝性疾患にまで広げる拡張優生主義の流れは、産児調節運動家らの働きかけによって立法化に至ったのである(松原 1997)。

こうした文脈を念頭に、発表者が取り上げるのは戦後初期の産児調節運動である。政府は深刻な人口過剰問題を解決するため、人口抑制を方針として打ち出し、1950年代から受胎調節を軸とする「家族計画」の普及が目指された(荻野 2008)。この運動に積極的に取り組んだのが財団法人人口問題研究会である。理事長の永井亨は家族計画をあくまで出発点とみなし、最終的なゴールとして家庭の新秩序の再建と新日本の建設を

掲げた。

本発表では、人口問題研究会が注力した企業における家族計画運動を取り上げる(アジア家族計画普及協会 1959)。具体的には、企業の家族計画のモデルとなった日本鋼管の事例を取り上げて分析する。そこから、多くの労働者を抱えていた企業での家族計画が人々に与えた影響や、確立した家庭の新秩序を考察する。

#### 【参考文献】

アジア家族計画普及協会「企業体における新生活運動のすすめ方：家族計画及び生活設計」アジア家族計画普及協会編、1959年。

荻野美穂「『家族計画』への道 近代日本の生殖をめぐる政治」、岩波書店、2008年。

松原洋子「<文化国家>の優生法 優生保護法と国民優生法の断層」現代思想 25(4)、1997年。

田間泰子「『近代家族』とボディ・ポリティクス」、世界思想社、2006年。

田間泰子「親子関係と生殖技術：戦後日本における近代家族成立の一側面」『フォーラム現代社会学』、第4号、2005年。

---

発表者：長澤 穂乃花

所属ゼミ：中山ゼミ（今泉ゼミ）

タイトル：デンマーク領グリーンランドにとってのデンマーク化

発表概要：本論文は、グリーンランドがデンマークの植民地から一地

方となる過程で、デンマークがグリーンランドをどのように捉え、いかにしてデンマーク統治下のもとデンマーク国家に組み込もうとしたのか（デンマーク化政策）、それに対しグリーンランドはデンマーク化によってどのような変化があったのかを、主に1950・60年代を対象にみていく。

グリーンランドは北大西洋に浮かぶ島である。グリーンランドに住むイヌイットは、寒冷気候に適應した習慣や生活様式を持ち、狩猟は衣食住や社会制度を支えており、彼らの生き方の一部である。

グリーンランドは1721年にハンス・エーゲゼが宣教と交易のため入植したことからデンマークの支配下に置かれ、近年まで支配が続いた。1953年にグリーンランド社会の自立を尊重することと、人民が完全に自治を行うに至っていない地域を持つ国連加盟国が負う義務と遂行する目的の為、グリーンランドはデンマークの一地方となった。

1950・60年代にデンマーク政府が設立したグリーンランド委員会が行った計画を、デンマーク化の端緒と本論文では捉える。学校教育の普及や医療面の進展などがデンマーク化で計画され、グリーンランドは急速に変化した。デンマークによるグリーンランドのデンマーク化の過程で、グリーンランド人は強制移住により狩猟から離れ、現金で購入したもので生活するようになり、アルコール依存などの社会問題が起こった。伝統的な生活や習慣に大きな影響があったと考えられる。

グリーンランドのデンマーク化に焦点を当てた研究は今のところ見つかっていない。グリーンランドに関する研究として国際政治経済学の高橋美野梨の『自己決定権をめぐる政治学—デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』（明石書店、2013年）があげられる。

高橋は1950・60年代のデンマーク化により、グリーンランドで自治志向が起こったと捉えている。1953年の統合に関し、「マイノリティの権利の尊重や基本的人権の尊重といった価値観に基づく「本土デンマーク」の政策的態度」と評価したが、デンマーク化によるグリーンランド社会の変化についてはあまり論じていない。

一方、主にカナダのイヌイットを研究するスチュアートヘンリは、1721年以降のデンマークのグリーンランドに対する対応を、カナダ政府の姿勢と比較し、グリーンランド社会への干渉は最小限であったとしている。しかし、1950・60年代のデンマーク化においても干渉が最小限であったのだろうか。

本論文では高橋が論じていないデンマーク化の過程の中で、グリーンランド社会の変化を明らかにする。グリーンランドのデンマーク化を対象にした研究はほとんどなく、入手できる資料も限られている。デンマーク人ジャーナリスト、ポール・ハンメリクのグリーンランドに関するルポルタージュや、日本では公開されていない映画『実験』（2010年）を用いて、グリーンランド人の生活

からデンマーク化を明らかにする。

発表者：志賀美南

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：“ピクチャレスクな旅”  
「バックグラウンドツアー」の展開  
京都市東山区二年坂・三年坂における  
「アンノン族」と「きもの女子」  
の比較から

発表概要：「絵に描いたよう」な  
景色を求めて旅行をする。「見たこ  
とがあるよう

」な景観を背景に写真を撮る。観光  
地のパンフレットや宿泊先のホーム  
ページ、SNS の投稿など、なんの情報  
にも影響されずに旅に出ることは  
今ではかえって難しい。フーコーの  
「まなざし」論を観光分野に応用し  
たジョン・アーリは、観光客にとっ  
て「旅行とは、出かける前に、原形  
としてすでに見ているイメージの、  
自分用に焼き直したものを、現地で  
指さして、そこに確かに来たという  
ことを証明する作業に結局なってい  
るのだ」と述べる [アーリ, 2000]。

事前に仕入れた情報と実際の観光  
対象と見比べて楽しむ旅は、「ピク  
チャレスク」という概念と関連付け  
て長年研究されてきた。「ピクチャ  
レスク」とは、「絵のような美しさ」  
を表した美術と建築の用語である  
が、1972 年にウィリアム・ギルピン  
によってアルプス山脈を代表とする  
代表的なランドツアーの景色と関  
連付けて語られてから、「絵をみる

ようなまなざしで物珍しい景色を眺  
め」る [岡田温司, 2010]という観光  
学

的な意味も内包された。ギルピンの  
言う「ピクチャレスク」とは、絵画  
を見た人がその専門知識を自然の景  
色にあてはめて楽しむという意味で  
あったが、様々な研究論文で絵と写  
真の両方が「ピクチュアレスク」を  
引き起こすこと、都市のランドスケ  
ープも「ピクチュアレスク」的まな  
ざしで考察され得ることが示唆され  
ており、それを行う観光客も、もは  
や専門家に限られるものではなくな  
っている。よって、「ピクチュアレ  
スク」とは観光客一般が、絵画や写  
真を見るような見方で、大自然の景  
色や都市の景観を眺めて理解する態  
度である、と定義づけてよいだろう  
。

しかし、それが現代の「ピクチャ  
レスク」のすべてであろうか。従来  
の「ピクチュアレスク」においては、  
花鳥風月や趣深い廃墟など、あく  
まで人のうつり込んでいない風景画  
が旅先の景色を読み解くキーであっ  
た。その傾向はいまだ健在であるが、  
観光活動に女性が加わり、観光ア  
クティビティにファッションが結び  
付いた現代社会においては、観光客  
を主題とし、風景をバックグラウン  
ドとする観光地の捉え方が新たに浮  
かび上がってくるのではないか。

そこで本稿では、観光客を主題、  
観光地の景色・景観を遠景とする関  
係性をもった観光を「バックグラウ  
ンドツアー」と表現し、京都市東山  
区二年坂・三年坂を舞台に、「アン

ノン族」と「きもの女子」という二つの事例から考察する。1970～80年に女性観光の先駆的存在として登場し、女性誌「アンアン」「ノンノ」を片手に最先端のファッションで古都を歩いた「アンノン族」。1990年代後半～現代までみられ、観光地の和服レンタルサービスを利用して古都を散策する「きもの女子」。両者の比較から「バックグラウンドツアー」の展開について示すのが本稿の目的である。

キーワード：ピクチャレスク、「バックグラウンドツアー」、「アンノン族」、「きもの女子」、ジェンダー

発表者：富田駿

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：地域の課題を乗り越えた特区民泊 ―小さくゆっくり始めた東京都大田区の3年間―

発表概要：訪日外国人の増加に伴い宿泊施設不足が生じるようになり、解決策として既存住宅を利用した民泊が注目されている（松永 2018）。一方、民泊導入に対して安全対策や衛生管理の不十分な宿泊施設の拡大や、近隣住民とのトラブルが起こるといった課題が指摘されている。そのような状況の中、東京都大田区では国家戦略特別区域を活用した特区民泊制度が2016年に全国で初めて導入された。

本研究では「民泊に対して課題がある中で、大田区における特区民泊

はどのように導入され、どのような成果を上げたのか。また、課題は払拭できたのか」という問いに取り組み、今後の特区民泊事業に対して改善の方策を提示する。調査方法はインタビュー調査を用い、特区民泊や大田区の宿泊施設に政官民の立場で中心的に携わるアクターに話を聞いた。結論は以下の通りである。

制度導入当初、地元のホテル旅館組合は特区民泊導入に反対していたが、近隣住民の安心・安全が守られることを条件に特区民泊を認めた。この条件は後に条例によって法制化された。また、ホテル旅館組合に近い区議会議員による同組合への説得も功を奏した。先行研究で指摘されていた民泊に対する課題は、大田区では未然に回避された。課題を払拭できた理由は2点ある。まず、大田区では国の立法措置より先んじて民泊

に対して条例が整備されたことである。2点目に、特区民泊認定施設数が3年間で増加したが、区全体の宿泊者数と比べると僅かな人数しか泊まらない。民泊の規模が小さく、拡大の速度がゆっくりだったため、問題が生じなかったと言える一方で、規模が小さ過ぎて、大田区は民泊導入による利点を活かしきれてないとも指摘されている。制度導入による地元の混乱を起こすことなく、民泊の効果をよりもたらすためには、特区民泊利用者に関する統計データを充実させ、地元で課題が生じないスピードと規模をより精緻に分析する必要がある。



本研究は大田区の特市民泊導入に携わったアクターに絞ってインタビュー調査を実施したため、民泊事業者の調査は行わず、先行研究では指摘されてなかった新たな課題を把握しなかった。しかし、特区民泊の先駆けとなった大田区の制度導入から3年間の成果をもとに、地元で生じる課題を防ぎながら制度の効果を最大化するために必要な方策を提示したことは、大田区だけでなく、後に続く特区民泊制度を導入する都市にとっても参考材料になるに違いない。

松永光雄 (2018) 「観光インバウンドにおける民泊の役割とその可能性」『不動産研究』第 60 巻 4 号,23-28 頁

発表者：小林寛子

所属ゼミ：中山・今泉ゼミ

タイトル：高度経済成長期の川口市域地場産業における女性労働

発表概要：本論文は、高度経済成長期の埼玉県川口市に焦点を当て、市域の地場産業である鋳物業・またその周辺産業（機械業）の中小企業で働く女性たち・労働者を支える女性たちを考察するものである。川口鋳物業に関しては、いくつかの研究が行われているが、その研究の中に女性に関する視点は含まれておらず、女性に関する記述が一切無いものも多い。しかし、地場産業に関わる女性たちは確かにそこに存在し、女性たちが産業全体を支えていたことは

明らかだ。本論文では主に祖母へのインタビューをもとに女性の労働を考察する。

川口の地場産業に関わる女性の労働として、2種類の労働が考えられる。第一に、女性が工員の一人として実際に工場内で働く労働である。高度経済成長期の自営業層では、妻の雇用者比率が低下している。このことは、経済成長のもとで若年労働力が払底した分を補うため、妻が家業を担う必要が発生し、雇用者として勤めに出るのではなく、経営を支える一員としての役割を担ったことを表す。こうしたことから、当時、ほとんどが中小・零細企業である川口の地場産業においては、家業を妻や娘が手伝う傾向が強まったと考えることができる。第二に、町工場の工員や事業主を家族にもつ女性の家事労働である。本論文で対象とする地場産業は、多くの場合、構成員が家族や工員数名の小規模事業所であり、工員が事業主の住居に下宿している場合や青年期の男子を後継ぎとして育てる「子がい」の習慣などがあった。川口市域の地場産業に関わる女性たちは、家事労働を通して家族だけではなく工員の生活も担い、事業の経営を支えていたと考察できる。

筆者の親戚で、川口市内の機械工場の二代目である小川澄男氏は、インタビューの中で「お母さん（澄男氏の母）は営業（的存在）だった」と語っている。筆者は、この証言が当時の川口市域の女性労働を考察するにあたって重要であると考え

尾高邦雄は、川口鋳物業の職人について金銭は職人の腕を磨けば付いてくるものという感覚を持ち、金銭にあまり執着せず、会計事務を妻や娘に任せる者が多いとしている。そのため妻が工場や得意先を回って集金・回収をするのがむしろ通常であった。尾高は、得意先を駆け回り、家計を管理する川口の女性たちの姿を「川口のかかあ天下」という記述を用いて表している。以上のことから、川口市域の鋳物業・機械業に共通して、女性たちが事業における金銭管理の役割を担い、事業運営に重要な役割を担っていたことがわかる。川口の女性が鋳物業の盛衰の過程で、どのような労働環境にあり鋳物業においていかなる役割を果たしたのかをインタビューなどをもとに考察する。

---

発表者：倉澤花歩

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：食品の移動が作り出す人と人とのつながりーフードバンクかながわを事例にー

発表概要：フードバンクについての研究は、食品ロス削減と生活困窮者支援の観点からの研究が主流を占めてきた。食品ロス削減の観点からは、農林水産省が中心に実態調査を進めてきた。フードバンクは食品ロス削減に有効な手段である一方、食品の横流しや食品の管理体制、食品関連企業が活動に参加しやすくなる環境

の整備が課題として指摘されている〔e.g., 三菱総合研究所 2009〕。生活困窮者支援の観点からは、日本のフードバンクから食料を受け取っている福祉事業所、社会福祉協議会、施設や支援団体による食料支援が生活困窮者支援に果たしている役割と課題が考察されている〔e.g., 佐藤 2018〕。

本発表ではこうしたフードバンクの役割とされる食品ロス削減や生活困窮者支援ではなく、フードバンクを介した人と人とのつながりに着目する。従来の研究ではほとんど触れられていない「人」に焦点を当てることで、フードバンクの役割の多様性を指摘し、フードバンクを介し食品が移動する過程で、直接的・間接的にどのような人間のネットワークが形成されているのか明らかにすることを目的とする。この人的ネットワークの構築を分析するにあたり、人々の信頼関係や結びつきを表す概念である「ソーシャル・キャピタル」を本発表では用いる。

ソーシャル・キャピタルという概念については、様々な議論が行われており、その明確な定義については、合意が存在しているというわけではない。ここでは、代表的な研究者であるパットナムのソーシャル・キャピタル概念を土台に、「信頼」「規範」「ネットワーク」「心の外部性」をソーシャル・キャピタルの主たる構成要素とする稲葉（2011）の概念を用い、「人」に焦点を当てた事例分析を行う。

本発表ではケーススタディとして、

公益社団法人フードバンクかながわの活動を取り上げる。フィールドワークならびにインタビューを通じて、本フードバンクを介して食品の所有者が変わり、その移転に伴い人と人とのつながりが形成されている過程を検証する。同時に食品を提供している企業や個人、食品を受け取る団体についても調査を行い、フードバンクを介した人的ネットワークの構築を明らかにしていく。

【参考文献】

稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』（中央公論新社、2011）

佐藤順子「日本のフードバンクと生活困窮者支援」『フードバンクー世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』（赤石書店、2018）

三菱総合研究所「平成 21 年度フードバンク活動実態報告書」  
[http://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku\\_loss/foodbank/pdf/data1.pdf](http://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/foodbank/pdf/data1.pdf)（2019 年 11 月 5 日最終アクセス）

要藤正任『ソーシャル・キャピタルの経済分析 「つながり」は経済を再生させるか』（慶応義塾大学出版株式会社、2018）

キーワード：フードバンク、ソーシャル・キャピタル

タイトル：日本におけるフィリピン系ニューカマー第二世代児童の生活環境と教育問題

発表概要：ニューカマーが来日し始めた 1980 年代以降日本には多くの外国人が居

住するようになり、フィリピン人は現在約 30 万人滞在している。1980 年

代から 40 年ほどたった現在は、ニューカマーの親の呼び寄せによって学齢期に来日し日本で教育を受ける子どもだけでなく、日本人とフィリピン人との国際結婚による日本生まれ日本育ち、日本国籍のフィリピン系の子どもも増えており、彼らの抱える問題は多様化している。本報告では、多様な背景を持つ第二世代の教育面に焦点を当て、インタビュー調査などをもとに、学習における現状を明らかにする。

まず、本報告での対象は以下のように限定する。すなわち「ニューカマー」とは、1980 年代以降に日本社会に到来した新来外国人を称し、ニューカマーの親世代と子世代をわけするため子世代を「ニューカマー第二世代」と定義する。また対象とする学校教育の範囲としては、限られた者のみがアクセスすることのできる高等教育以上の学校は含まず、義務教育である小学校と中学校の公教育に限定する。

フィリピン系ニューカマー親世代の大半は元「エンターテイナー」の女性たちである。第二世代は日本人男性との間に生まれた日比国際児と

---

発表者：河原裕子

所属ゼミ：中山・今泉ゼミ

、母の連れ子で呼び寄せによって来日した子どもたちである。彼/彼女らは「ダブルリミテッド」と呼ばれ、「一つ以上の言語に触れて育つ言語形成期の年少者がどの言語も年齢相応のレベルに達していない状況」やアイデンティティ形成などの問題を抱えている。

「ダブルリミテッド」は日本語が不自由な親が、家庭内で日本語とフィリピン語と混ぜて使ってしまうことや、学齢期に日本へ移動したことにより、学習言語が未発達になることで発症してしまう。また彼らは日本人父がフィリピン文化に批判的であったり、友人や周囲の人々のフィリピンに対する無知や無関心、偏見を日常生活の中で感じ取ることも多く、日本とフィリピン両方を併せ持ったアイデンティティが形成しにくい環境に置かれている。日本生まれ日本育ちであっても、上記のような理由に加え、経済的な問題もあり日本の大学はおろか、フィリピンの大学への進学さえもかなわないことが多い。

しかし、日本の公教育では「ダブルリミテッド」が抱える問題を克服できるような制度を整えていない。なぜなら、「公教育＝国民教育」という枠組みのなかで営まれているからである。そのため「日本語によって学ぶ能力」だけが評価対象となり、日本語の不自由なニューカマーは「低学力」と判断されてしまう。日本語での日常会話はできるため、ダブルリミテッドの生徒はしばしば教師から学習

障害とみなされてしまっている。

本論では、フィリピン系ニューカマー第二世代の抱える日本における生活環境や社会的な背景を明らかにするとともに、学習困難ならびに教育問題を通して彼らが抱える題を考察する

---

発表者：小林恵梨奈

所属ゼミ：興石ゼミ

タイトル：Accents of English

発表概要：本発表はイングランドの労働者階級の英語によく見られるコクニーの英語や、ロンドンなどイングランド南東部で話されている河口域英語

(Estuary English) の歴史的背景・音声的特徴・特徴的な言い回しなどを

扱う。もし、「ロンドンの人の話す英語はどんな英語か？」と聞かれた場合、何と答えるだろうか？多くの場合エリザベス女王やイギリスの皇族が話すような、容認発音 (RP・Received Pronunciation) と呼ばれる変

種を想像するだろう。しかしイギリス内の方言は想像する以上に多岐に渡っており、地理的に少し離れただけで相手の話す英語が理解できない、ということも起こり得る。日本の義務教育での英語はアメリカで話されている一般米語 (General American) が主で、イギリスで話される英

語を聞く機会はほとんどないと思われる。しかし、本発表者にはロンドン出身の友人ができ、イギリスで話される英語に目を向けるきっかけになったとともに、イギリス内の方言に強い関心を持つようになった。一例を挙げると water という語で、同友人は [wɔ:ʔə] と、声門閉鎖音 (glottal stop) を用いて発音していた。ロンドン周辺の英語の特徴を知り理解を深めることで、実際に足を運んだ際、現実的に、相手の言葉を理解しコミュニケーションを円滑にとるのに役立つことはもちろん、英語の方言がいかに多様な特徴を持っているかを知ることにつながると考える。ロンドンという地理的に限られた範囲内でさえ言葉の持つ多様性の範囲が広いのであれば、イギリスという一つの国単位で考えるとさらにその違いはさらに多岐に渡るし、イギリスだけでなく、アメリカやカナダ他、世界の英語の特徴に目を向け、理解を深めるきっかけとなるのではと発表者は考える。さらに、それぞれの言語をむやみに一つのくくりに入れて考えるのではなく、その中に地理的・歴史的・社会的・階級的要因から生じる多様性を同時に併せ持っていることを理解し、コミュニケーションツールである言語を様々な異なった視点から見ることにつながると本発表では論じてみたい。

---

発表者：田代奈穂子

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：なぜボランティアを続

けるのか—外国人収容所に通う 3 名のライフストーリーから—

発表概要：本研究は、継続が難しいと思われるボランティアの継続要因を探ること

を目的とする。ボランティアは主に①満足感や自己成長感といった自己報酬②人のためを思う利他心③ボランティア活動を通して築く人間関係の 3 点が継続要因として挙げられる (妹尾 2008)。一方でボランティアをやめる要因として活動を続けた後燃え尽きてしまうバーンアウト、相手に共感することによって生じる共感疲労、代理性トラウマが挙げられている (藤岡 2016)。

本研究で扱う牛久の会は、茨城県牛久市にある外国人収容所で活動を行っているボランティア団体である。外国人収容所とは、在留資格が無いが様々な理由から自国に帰ることのできない外国人が収容される施設である。牛久の会は収容されている外国人に対しての面会活動、施設に対する抗議活動などを行っている。彼らの活動では収容されている人が本当に望む収容からの解放や正規の在留資格を与えることはできない。それにもかかわらず牛久の会は 25 年間も活動を続けている。牛久の会がボランティアをやめる要因が起ると考えられる状況で活動を継続していること、さらに先行研究だけでは継続要因が説明できないことから「なぜ牛久の会はボランティアを継続できるのか」という問いを設け、牛久の会で面会活動を継続している 3

名に複数回インタビューを行い、ライ

フストーリー分析をした。結論は以下の通りである。

3名に共通していたのは、牛久の会に入る以前から人間の尊厳や命に関心を持っていたことである。その関心は薬物依存で人間らしく生きることのできなくなった人を見ていたことや、幼い頃に聞いていた戦争で苦しんだ人の話を聞いたこと、政治的理由で殺害された友人がいることから、関心が生じていた。また、牛久の会の目的である、収容されている人の解放は彼らの活動では達成できていないものの、世間に収容所のことを伝えるようにすることやといった、目的とは異なる活動の意味を見出していた。牛久の会の継続要因には、先行研究で論じられている要因に加え、過去の経験から生じた個別の関心や、目的とは異なる活動の意味が、継続要因としてあったことが明らかになった。

本研究では一部のボランティアにしかインタビューできておらず、すべてのボランティアに当てはまるとは言えない。しかし、ボランティア個人の人生と継続要因の関連性を明らかにし、先行研究では論じられていないボランティアの継続要因を示せたことは本研究の意義である。

妹尾香織 (2008) 「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第16号、35-42頁。

藤岡孝志 (2016) 「支援者支援学 (1) 支援者支援学とは」『こころの科

学』第189号、92 -98頁。

発表者：友利サイナ

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：義務教育後の外国人生徒の学力向上と進路選択支援—東京都立大田桜台高校の事例から—

発表概要：本研究は、日本語能力などの困難を抱える外国人生徒が義務教育後に

どのような環境で学力を伸ばし、その後の進路選択が可能になるのかを

、ある都立高校を事例に考察する。

1990年の入国管理・難民認定法改正後、日本で働く外国人労働者及び

その子弟が増加した。滞在の長期化に伴い、外国人子弟の教育課題は学校への適応や日本語教育から、学力

保障や義務教育終了後の進路へと拡大していった (広崎 2007)。

高校進学に課題を抱える外国人子弟を助けるため特別処置制度が2002年に導入

された。以降、外国人子弟の高校進学率は向上した。彼らの教育課題は

大学進学やその先の将来へと広がってきていると言える。

本研究は、各学年に約10人の外国人生徒が在籍する東京都立大田桜台

高校 (以下、桜台) で調査を行った。桜台の一般入試の倍率は2018年と

2019年の2年連続、1.0倍を下まわり、外国人を含む生徒のほとんど全員が進学できる状況であった。先行

研究によると、外国人生徒と日本生徒が混在する学校において専門化した教員が外国人・日本人の区別なく

一斉指導を進めた場合、外国人生徒は取り残されていく。外国人を含む生徒の受け入れをしている桜台も例外ではないものの、2018年度の桜台の大学進学率は66.3%であった。同年度の全国現役生の大学・短大進学率54.8%を上まわっている。桜台は外国人を含む生徒全体の学力をどのようにひき上げ、卒業後の進路選択を実現させているのだろうか。2018年から2019年にわたって計7回高校を訪問し、教員5人と生徒1人に聞き取り調査を行った。また、筆者の教育実習期間のうち5日間の参与観察を実施した。結論は以下の2点である。

第1に、学校側は一部教科を少人数の習熟度別クラスに編成し教科や資

格取得に向けた補習活動で生徒をひき上げる工夫をしていた。外国人・日本人にかかわらず大多数の生徒が学習支援を必要としており、教員は放課後などを利用してフォローアップを行っていた。

第2に、生徒の卒業後の進路をかなえるために、マンツーマン体制の教員による入試対策が実施されていた。教員1人が3~5人の生徒を受け持ち、生徒の志望する学校の自己推薦入試や推薦入試などAO方式の入試に合わせ対策をしていた。

以上から、桜台は生徒の将来の可能性を広げるため、少人数制の授業や、資格取得を促進する活動、マンツーマン体制のAO方式入試対策など

を取り入れ、戦略的に大学進学など将来の選択肢を増やしていると言える。

本研究では、生徒の話を聞くことができなかったが、義務教育後の外国人生徒の学力向上や進路選択支援の1つの実例を示した点に意義がある。

宮島喬・太田晴雄(2005)『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版。

広崎純子(2007)『進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意義と進路選択一支援活動の取り組みを通じての変容過程』『教育社会学研究』第80集、227頁。

発表者：周翠彦

所属ゼミ：岩川ゼミ

タイトル：中国におけるリメイクドラマの放送に関する研究—一日中リメイク作品の比較分析を中心に—

発表概要：中国におけるリメイクドラマの放送に関する研究

—一日中リメイク作品の比較分析を中心に—

研究背景：

①中国での日本ドラマの放送

第一段階は1980年代~90年代前半である。1978年、中国と日本は「中日

和平友好条約」(日本では「日中平和友好条約」という)を締結し、中日の文化交流が始まった。1981年、上海テレビ局で中国語吹き替えの日本ド

ラマ「姿三四郎」が放送され、それは中国のテレビ局で初めて放送された日本のドラマとなった。この時代のドラマは主に家庭に関する「ホームドラマ」である。「ホームドラマ」は、庶民の家庭を舞台とし家族間の葛藤もしくは、家庭内問題などをユーモアとパトスを混ぜて描写したドラマをいう。

第二段階は 90 年代後半～21 世紀初期頃である。80 年代後半、バブル

経済で消費が過熱していった日本では従来の「ホームドラマ」が姿を消し「トレンドドラマ」という新しいジャンルが主流となった。

#### ②「韓流」ブームから「限韓令」へ

90 年代後半から中国大陸での日本のテレビドラマの放送数は次第に減少した。その代わりに、韓国ドラマが中国のテレビに入った。韓国ドラマが中国でその影響力を拡大し続け、「韓流」を形成した。しかし、2017 年、中国と韓国の関係が悪化しており、「韓流」輸入に制限が加えられてきた。これまで韓流ブームが長く続いていた中国は、やむなく日本をメインとする他の国の資源の発掘に移行した。

#### ③日本ドラマの放送からリメイクドラマの制作へ

2015 年 11 月、フジテレビと SMG ピクチャーズは戦略的パートナーシップを締結し、ドラマ『プロポーズ大作戦』（2007 年）、『デート～恋とはどんなものかしら～』（2015 年）の中国版を共同制作し、中国で放送・配信してきた。作品のおもしろ

さを求める声は日々高まり、中国では日本の IP（知的財産権）購入がピークを迎えている。

#### 研究方法：

2015 年から、中国がリメイクした日本ドラマの中にいくつかの作品を選んで、日本の原作ドラマと比較分析する。

#### 比較分析①

「花より男子」（日本）と「流星花園」（中国）、「プロポーズ大作戦」（日本）と「求婚大作戦」（中国）、「深夜食堂」（日本）と「深夜食堂」（中国）この六つのドラマをそれぞれ比較分析を行う。

#### 比較分析②

「問題のあるレストラン」（日本）と「問題レストラン」（中国）、「家売るオンナ」（日本）と「家売る人」（中国）、「地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子」（日本）と「時間を無駄にしない」（中国）この六つのドラマをそれぞれ比較分析を行う。

#### 研究目的：

中日文化交流に伴うドラマのリメイク行動から見る中日ドラマの制作制度の違いを分析し、リメイク上の問題を解明する。分析しながら、日本ドラマの特徴を研究し、日本の社会性と中国の社会性の違いを知り、リメイクドラマが中国で賛否両論の原因を明らかにしたい。また、中国市場にはどのようなタイプのドラマ作品を求めているのかを明らかにして、中日の文化的アイデンティティと共同性を発見することもできるであろう。



発表者：岩田真里奈

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：女子の種目であったダンス教育の歴史－伊澤修二・成瀬仁蔵の思想から見る背景－

発表概要：学会発表予稿

平成20年度、学習指導要領が改訂され中学1・2年生において、「武道」「ダンス」を含むすべての領域が男女必修となることが示され、平成24年度に完全実施となった。ダンス分野の教育は、歴史をさかのぼれば明治5年の学制発布以来100年以上にわたって行われてきた。しかしその長い歴史において主な対象となっていたのは女子であった。本発表では、ダンス教育が女子の種目として長い間行われてきた背景を明らかにしていきたい。

明治7年に愛知師範学校校長となった伊澤修二(1851-1917)は外国の遊戯を参考にし、唱歌を歌いながら動作をする遊戯に教育的意義を見出し、のちに「唱歌遊戯」と呼ばれる遊戯を編み出した。この遊戯は、幼稚園の創始者であり幼児教育の礎を築いたドイツの教育家であるフリードリヒ・フレーベル(Friedrich Fröbel、1782-1852)の遊戯をモデルとしていた。伊澤は明治9年に開設された日本初の公立幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園において、遊戯教育を実践していった。明治

14年に小学校教則大綱では、「徳

性の滋養」を目的として、「遊戯」が体育の種目として初等科1・2年生に配置され、全国に普及した(村山、2000年)。

唱歌遊戯に関する先行文献においては、明治20年代の後半から遊戯(唱歌遊戯)が運動会に本格的に導入されるようになり、明治30年代半ば過ぎには、運動会に欠かせないものとなっていった(高橋、1997年)。明治27年7月に発刊された『遊戯法』から、小学校教則大綱制定後の明治20年代は多数の学校で男女ともに遊戯が実施されていたが、次第に男女で行われる遊戯の種類に違いが出始め、唱歌遊戯は女子を対象としたものになっていった(高橋、1980年)。明治30年代後半、青年男子には律動的な補強運動の行進が実施されるようになり、唱歌遊戯は女子の種目となった(中村、2013)。しかし、一時期は男子にも実施

された唱歌遊戯が女子の種目として扱われるようになっていった背景については議論されていない。

本発表では主に明治30年代の思想的背景を伊澤修二と日本女子大学の創設者であり女子教育に尽力した成瀬仁蔵の思想から明らかにしていきたい。

参考文献

・高橋春子 著「明治20年代の遊戯教育における一考察」『中京体育学研究』20巻2・3号 1980年。

・高橋春子 著「明治期運動会に於ける唱歌遊戯・ダンスについての一考察」『中京大学体育学論叢』39巻

- 1号 1997年。  
 ・橘木俊詔 著『女性と学歴—女子高等教育の歩みと行方—』勁草書房、2011年。  
 ・中村恭子 著 「日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題」『スポーツ社会学研究』21巻1号 2013年。  
 2019年度国際文化情報学会 応募用紙（書式A・書式B）  
 3  
 ・村山茂代『明治期ダンスの史的研  
 究—大正2年学校体操教授要目成立  
 に至るダンスの導入と展開—』不味  
 堂出版、2000年。  
 など

---

発表者：小嶋鈴乃

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：なぜスラムと呼ばれているのか—国際協力における呼称の働き—

発表概要：タイ、バンコクには、かつてスラムと呼ばれたクロントイという地区がある。1982年に、スラムというマイナスイメージを与える呼称は住民への配慮に欠けるとの理由から、政府が呼称を禁止し、クロントイ地区は「人口密集コミュニティ」となった。インフラ整備なども行われ、地区の外観はきれいになったにもかかわらず、現地で活動する国際 NGO などの支援者はクロントイ地区のことをスラムと呼ぶ。本研究は、クロントイ地区で活動する支援者が、この地区をいまだにスラム

と呼ぶ理由を明らかにし、国際協力における呼称の働きを考察する。先行研究では、国際協力においてマイナスイメージを与える表現を使うのは、道徳心を掻き立て、支援を集めやすくするためだとしている（クライマン 2011）。一方クロントイ地区を訪れた人は「ここはもうスラムではない、支援は必要ない」と述べることもある（SVA 1996）ため、先行研究の説明は十分ではない。そこで「クロントイ地区で活動する支援者たちは、なぜこの地区をスラムと呼んでいるのか」という問いを立て、地区がスラムと呼ばれ始めた1960年代から現在までの歴史を、主に文献調査と現地で活動する国際 NGO 職員のインタビューからひもといた。結論を以下に示す。

クロントイ地区で活動する支援者がスラムと呼ぶ理由は、長い間存在しているが住民以外からは見えにくい問題を外部の人々に認識させるためである。クロントイ地区の外観はきれいになり、タイではスラムと呼ばれないことで、住民以外には問題が解決されたように感じられてしまう。しかし、クロントイ地区の住民たちには貧困や強制立ち退きのリスクが今も付きまとう。先行研究では、マイナスイメージの言葉の使用は、道徳心に訴えて支援につなげるためだと述べられていた。一方で、クロントイ地区の支援者は見た目や呼称によって覆い隠されるクロントイ地区が抱え続けている問題を、スラムという言葉によって地区の外の人々に認識させ、住民の権利の尊重や

生活環境の改善や、そのための支援を求めてきた。

問題を抱えた物事の呼称がマイナスイメージを取り去った形に変更されることで、外部からは問題が解決したように見えることがある。重要なのは、呼称の変更理由や、問題は解決したのかなど、呼称が使われる理由と背景を探ることである。そうすることで、支援を必要とする場の実態を明らかにできる。本研究の限界は、クロントイ地区という1ヶ所の限られた対象への調査にとどまった点である。しかし、国際協力で共感を呼びやすい言葉が使われる物事の裏側を知る重要性を示した点で、この研究には意義がある。

SVA 曹洞宗国際ボランティア会編 (1996) 『アジア・共生・NGO タイ、カンボジア、ラオス、国際協力教育の現場から』明石書店。  
 クライマン,アーサー (2011) 『他者の苦しみへの責任 ソーシャルサファリングを知る』みすず書房。

---

発表者：清水菜歩

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：役割期待の変遷とギャップ —日本人学校の帰国生徒の事例から—

発表概要：近年グローバル化が進むにつれ、海外で働く日本人の数が上昇してきた。それに伴い海外で教育を受け、一定期間海外で生活して再び日本へと帰国する子ども、いわ

ゆる「帰国子女」も増加した。一般的に帰国子女の特性として、ネイティブレベルの英語力やコミュニケーション能力が高いなどの肯定的なもの、自己主張が強い、協調性に欠けるなどの否定的なものも挙げられている(渡部・和田 1991)。そして特性の一つである国際感覚を持つというポジティブな点を活かし、周囲の子どもに影響を与え、国際理解教育を促進することが求められている。「帰国子女」が社会からこのような役割を与えられるように、人々は地位や状況に応じて何らかの役割を遂行することを他者から期待されている。これを役割期待と呼ぶ(後藤 1999)。役割期待に応えることは人間関係の維持に役立つが、その一方で役割を果たせない場合、対人葛藤を生じる恐れがあるということが示唆されている(下斗米 2000)。前述した「帰国子女」の役割期待は、日本に利益をもたらす存在として、「帰国子女」の肯定的な面をステレオタイプ化しつくられている。しかし「帰国子女」個人の経験は、滞在年数、滞在国、滞在先の教育機関などによって大きく異なるはずである。それにもかかわらず、「帰国子女」という1つのカテゴリーに収斂されてしまっている。そのため「帰国子女」というカテゴリー自体を再定義していく必要があることが指摘されているが(佐藤 2005)、このことに関する研究はまだ少ない。そこで本発表では、「帰国子女」のイメージとのギャップを経験する

人々に着目し調査を行う。アジアの帰国生は日本人学校で学ぶことが多く、欧米からの帰国生を中心に作られた「帰国子女像」にコンプレックスを抱えるといわれている（渡部・和田 1991）。このことを踏まえ本発表では、日本人学校出身の帰国子女と「帰国子女」像との関係を捉えるためのアンケート調査を行う。この調査を通して日本人学校出身の帰国生が、役割期待にいかに関与しているのか、自分の海外経験についてどのように考えているのかを明らかにしていく。また日本人学校の生徒の間には、他の帰国子女とは違う特有の文化が存在しているのではないかという仮説を立て、アンケート調査によりこれを検証していく。

参考文献  
・後藤将之『役割期待 心理学辞典』有斐閣、1999年。

・佐藤郡衛「海外子女教育にみる『日本人性』の問題とその再考」佐藤郡衛、吉谷武志編

『ひとを分けるもの つなぐもの』ナカニシヤ出版、2005年。

・下斗米淳「友人関係の親密化過程における満足・不満足及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行とのズレからの検討」『実験心理学研究』、40巻1号、2000年、1-15。

・渡部淳・和田雅史『帰国生のいる教室—授業が変わる・学校が変わる—』NHKブックス、1991年。

キーワード 役割期待、帰国子女、日本人学校、対人葛藤

発表者：内山舜介

所属ゼミ：曾ゼミ

タイトル：日本語ボランティア養成講座における人材育成—千葉県市川市を事例に—

発表概要：日本語ボランティア養成講座（以下、養成講座）は、在留外国人に向けた日本語学習支援を行うボランティアの養成をしているが、千葉県市川市でも当該養成講座を2004年に開講した。

筆者は現在、市川市の日本語教室で外国人児童向けの日本語ボランティアとして活動しており、ここでもこの養成講座の受講が推奨されている。しかし、この養成講座を受講した日本語ボランティアであっても、日本語の教え方が一方的で外国人学習者を困惑させている姿が散見されたため、この養成講座では十分な知識や技能を学ぶことができないのではないかと考えた。先行研究においても、養成講座を受講したにも拘らず活動に支障をきたしている日本語ボランティアが課題として挙げられていたため、筆者は講座内容に問題があると捉え、それを明らかにしようとした。

インタビュー調査を通して、市川市の養成講座を受講した日本語ボランティアが「講座内容は十分であり必要な知識や技能を学ぶことができた」と話していたことから、講座内容などを精査して原因を再考した。その結果、講師による一方向的な授

業、つまりインプットばかりでアウトプットする時間が設けられていないことが問題点ではないかと思いついた。

日本において、中国帰国者などの移民の教育的不利益を補償する「補償教育」についてみると、行政による日本語教育の補償は不十分で、日本語ボランティアがその不足を補っている現状がある。日本の「補償教育」の特徴は一方向的な指導にあり、これは学校教育の場においてだけでなく、ボランティアによる日本語教室においてもみられる傾向である。そのため、日本語ボランティアの養成講座も双方向的な「相互学習型」（日本語教育学会、2008）ではなく、一方向的に知識を教授するという「日本語・日本文化教授型」（同上）になっているのかもしれない。養成講座では、インプットばかりでアウトプットする時間が設けられておらず、受講した日本語ボランティアは講座で身につけた知識や技能をボランティアの現場で十分に活かすことができていると考へた。インタビューした日本語ボランティアが「養成講座では説明を聞いている時間が多い」と話していたことから、市川市の養成講座も「日本語・日本文化教授型」（同上）のタイプだといえるだろう。インプットばかりに力を入れたため、市川市の日本語教室で学んだことを上手くアウトプットできない日本語ボランティアがいるのではないだろうか。目下、筆者は市川市の養成講座を受講して参与観察を行っている。今

後は調査を継続して、日本語ボランティア養成講座における人材育成の現状や改善点を抽出していきたい。

参考文献

日本語教育学会（2008）『平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）報告書』日本語教育学会

---

発表者：村田知哉

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：「『最貧国』が見えにくくするもの—小学校中退者と乳幼児の死亡者がいないラオスの村—」

発表概要：最貧国に分類されるラオスは、小学校における中退と安定した食料確保ができないことによる乳幼児死亡が問題であると国連に指摘されている。しかし、同国シエンクワン県の2つの村では、これらの問題が起きていない。レイ村では、5年間小学校における中退者が出ておらず、ミエンナラン村では、45年間乳幼児死亡が確認されていない。以上のことから、本研究は、なぜこれらの村には先に述べ

たような問題が起きていないのかという問いに取り組む。筆者らは上記の2つの村を訪れ、小学校に通う子ども、その親や教員、農民を含めた31人の村人に半構造化インタビューを行った。結論は以下の通りである。

レイ村では、親の教育への熱心さが小学校の中退者が出ることを防い

でいた。

山田 (2018) は、中退の原因として親が家計のために子どもを働かせることがあると指摘していたが、レイ村の親は、子どもが将来豊かで幸せに暮らすには、教育が必要であると考えていた。親自身が教育を受けられなかったことで教育の重要性を見出し、積極的に子どもを学校に通わせていた。また、政府は村の教育の発展を目的とした委員会を設置し、村内の親を委員に認定した。委員は学校に来

なくなった子どもの家に行き、教育の重要性を話すことで説得を行っていた。このことが多くの親が教育の重要性を見出す機会になっていたと考えられる。

ミエンナラン村では、伝統的な無農薬農法や農業以外の生計手段を活用することで乳幼児死亡を防いでいた。国連は、季節によって収穫量が左右される自給自足の生活から、農業で収入を得る生活に変える必要があるとしているが、村人は自給自足の生活に加え、家畜やきのこを売ることによって収入を得ていた。収入で食料を安定して確保できていたことが、乳幼児死亡を防ぐことにつながっていたと考えられる。また、収入の向上のためには化学肥料や大型機械を使った近代農業の

導入が有効であると考えられるが、NGO が村で行う有機農法プロジェクトでは、農薬による健康被害や農薬を使わずに収穫量を増やす技術を教えていた。このことは、村人が農薬を使用しない伝統的な農法の価値を

理解し、それを維持しながら

安定した収入を得ることを可能にしていた。

「最貧国」と呼ぶことで深刻な問題に目を向けやすくなるが、その問題を自らの力で回避したり乗り越えたりした村は注目されにくい。本研究では、最貧国と呼ばれるラオスで、外部からの大きなインプットに頼らず、自らが持っている経験や意識をうまく活かしながら政府や NGO と一緒に活動し、小学校の中退や乳幼児死亡の問題を回避している村の存在を明らかにした。ラオスの 2 つの村の事例のみであることは本研究の限界だが、「最貧国」に足りないものばかりではなく、村が持っている経験や意識にも目を向ける重要性を示したことには意義がある。

山田紀彦 (2018) 『ラオスの基礎知識』株式会社めこん。

---

発表者：北井寛人

所属ゼミ：松本ゼミ

タイトル：虐殺と呼ばれるまでのプロセス—カンボジアでの大量殺戮をめぐる日本政府の言説の変化—

発表概要：1970 年代後半にカンボジアを支配したポルポト政権が百数十万人の住

民を虐殺したことは、今日では当たり前前の事実として国際社会から受け止められている。しかし、79 年 3 月の日本の国会では、外務大臣はそれを「ポルポトの芳しからざる評判」と曖昧に表現していた。国会で日本

政府が初めて「虐殺」と明確に呼んだのはそれから 13 年後の 92 年である。日本政府がカンボジア「虐殺」と呼ばなかった理由や、呼ぶようになっていく過程を実証的に分析した研究はない。そこで本研究はこの 2 点について、国際社会による虐殺の認知は国家間関係に左右されるという先行研究（向山 2017）の理論を使って検証した。外務省の外交記録、国会議事録、新聞のドキュメント分析から導いた結論は以下の通りである。

日本政府はポルポト政権崩壊前から各国の日本大使館の公電により、カンボジアで大量の住民が殺されていたことを知っていた。それにもかかわらず、国会ではそれを曖昧に表現し続けた。その理由は、カンボジア内戦でポルポト派を支援していた中国とは平和条約を結んだばかりであること、日本にとって友好国であるアメリカや当時の ASEAN 諸国は反ポルポト派を支持するベトナムやその背後の旧ソ連と対立していたことが挙げられる。80 年代終わりには、中国とアメリカがカンボジア内戦をめぐり対立していたベトナム・旧ソ連との関係を正常化させていき、政治的配慮は不要になっていった。それにつれて、日本政府はカンボジアでの大量殺戮に対してより直接的な表現を使うようになり、92 年に国会で初めて「虐殺」と呼んだ。本事例においても政治的要因が与えた影響は大きく、先行研究の理論は有効だったといえる。

しかし、国家間関係を重視する政治

的要因のみが理由だとするならば、アジアの地域情勢が変化し、日本政府が国連でポルポト派の支持を止めた 89 年に「虐殺」と呼ぶことも不可能ではなかったはずだ。カンボジアでは 2001 年に虐殺の歴史を明らかにするための特別法廷が設置されたが、被告の高齢化で真実の追求が難しいことを考えれば、この 3 年の遅れ

は無視できない。第三国が政治的要因によって虐殺をいつ認知するのには時間的に幅がある。政治的要因で虐殺の認知が左右されるという理論に留まらず、その最終的なタイミングがどのように決まるのかについては更なる研究が必要である。現在まで明らかにされていなかった日本政府がカンボジア「虐殺」と呼ぶまでの具体的なプロセスをひもといたこと、先行研究の理論だけでは十分に説明できない部分に目を向け、新たな研究課題を提示したことに本研究の意義がある。

向山直佑「第三国による歴史認識問題への介入の要因と帰結—アルメニア人虐殺へのジェノサイド認定とトルコ」『国際政治』（187）、pp.30-45、2017 年。

---

発表者：加藤光

所属ゼミ：廣松・重定ゼミ

タイトル：日中ネット記事／世論における「精日」の言説：現在の「親日」の一形態について

発表概要：本発表は来年度提出予

定の修士論文の「序論」にあたる研究枠組みを提示することを主たる目的とする。つまり、「研究背景、先行研究、研究目的、研究方法」について、それぞれ論じると同時に、「研究方法」については具体的に解析例を提示したい。

本発表は以下のような順序で、修士論文の研究枠組みを論じる予定である。まず、「精神的日本人」（以下、「精日」）という言葉は、2018年2月22日南京の激戦地において、旧日本軍の軍服を着た中国人男性が拘束された事件を発端として利用され始めた。その後、3月8日の「全国人民代表大会」において記者からの「精日」に関する質問に対して、王毅外交部長激怒した事で有名になった事象である。さらに、全国政治協商会議で「精日」において「国家と民族の尊厳保護のための新法」が提案された。

「中国共産主義青年団」の発表によると、「精日」とは日本軍国主義の熱狂的信奉者であり、単に日本文化のアニメや漫画、料理を愛好する者ではなく、中国国家への反政府思想があり中国共産党及び中華人民共和国に侮辱、冒瀆する行動を実行する者であるとされている。

この「精日」現象は日本でも報道され、ネット上で様々な論争が巻き起こった。しかし、中国政府による発表とは対照的に、日本国内では“好意的な”意見がネット上では多く見受けられた。

このような背景から、昨今厳しさが増している日中関係・交流におい

て、中国側の親日派とされる「精日」が我が国に対して、なぜ、どのような観点から興味を抱いているのかについて論じる。具体的には、①彼らはなぜ、どのようにして「精日」に至ったと語られているのか、また②具体的には、どのような考えに基づいているのか、以上の2つの問いに

基づいて検討していきたい。

上記の目標を達成するため、修士論文では以下の3つの作業を行う予定である。まず、ネット上の解析対象として「微博」と「天涯」を選択し、話題となっている「精日」についての記事を比較検討する。そのために、Python を利用し WEB スクライピングを行い、記事・スレッドなどを保存する。次に保存したデータの解析として、「AI テキストマイニング」というソフトを利用して、テキストマイニングを行う。最終的には、解析結果から作業仮説を立てる。

このような研究を通じて、主にネット上における「精日現象」の語り方々の一端を分析することで、今後の日中関係を考察する上での布石としたい。

---

発表者：尹孝貞

所属ゼミ：高柳ゼミ

タイトル：尹東柱の作品を通した文化交流－日本の尹東柱記念活動を中心に

発表概要：1. 研究背景  
尹東柱は北間島（当時は中華民国）



で生まれ、ソウル（京城）の延禧専門学校（現在の延世大学）と日本の同志社大学と立教大学で学んだ。1945年に日本の福岡刑務所で獄死した。当時は無名の詩人であったが、1948年に詩集『空と風と星と詩』が韓国で刊行され、日本では1984年伊吹郷訳で出版された。韓国の国民的詩人である尹東柱は日本ではあまり知られていなかった。詩人茨木の子が尹東柱の詩をもとに書いたエッセイ『ハングルへの旅』が高校3年の『新編現代文』教科書（筑摩書房）に載せられた。そのことで、日本に尹東柱を大衆化し、日本の生徒たちに尹東柱の詩を知ってもらうことができた。尹東柱を記念する詩碑と尹東柱を記念する活動会が結成し、世代を超えて尹東柱の詩に共感している人々が増えている。

## 2. 研究目的

日本の尹東柱記念活動会の活動状況に対してはすでに研究され続け、特に生誕100周年を起点として彼の人生を振り返る中で、日韓中の尹東柱記念活動会も注目されるようになった。しかし、各活動会の経緯には触れているが、日本の尹東柱研究と記念活動に関する総括的なまとめはまだ行われていない。本研究は、日本の尹東柱記念活動全般に焦点を当て、各団体の結成と詩碑の建設が持つ社会的意味を考える。それぞれ活動の経緯と特徴を踏まえながら尹東柱をめぐって日韓の記念活動会がともに交流していることの意義を考察したい。そのうえで、尹東柱の作品を通じた日韓の文化交流が相互理解

につながる効果を考えることを目的とする。

## 2. 研究方法

- ① 同志社大学尹東柱詩碑（1995）、京都造形芸術大学の詩碑（2006）、宇治市「記憶と和解の碑」（2017）—尹東柱を記念する詩碑が建てられるまでの過程を調査。活動報告書や新聞記事に乗せられた状況を踏まえて文献調査し、詩碑の建設活動に参加した関係者とのインタビュー
- ② 「福岡・尹東柱の詩を読む会」（1995）、「詩人尹東柱を記念する立教の会」（2007）—尹東柱を記念する活動会の文化交流事業の状況。各活動会の関係者とインタビューを行い、活動の事業内容と活動に参加者のアンケート・感想文分析

---

発表者：岡本美貴

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：アイダ・B・ウェルズとニグロ・フェローシップ・リーグから見る革新主義期シカゴの人種とジェンダー（仮）

発表概要：【研究背景】

2019年2月、アメリカ合衆国シカゴのダウンタウンに位置するコンGRESS・パークウェイ（Congress Parkway）という通りが、アイダ・B・ウェルズ・ドライブ（Ida B. Wells Drive）に改名された。この通りの名前の由来となったアイダ・B・ウェルズとは、19世紀末から20世紀初頭にかけて

の革新主義期のアメリカ合衆国に

において、活躍したジャーナリストであり、活動家である。ウェルズは主に反リンチ活動家として知られ、公民権や女性参政権をはじめとする黒人の平等のために戦った黒人女性である。この通りの通称名変更計画を推進した市会議員のソフィア・キング（Sophia King）は、ウェルズは「権力に向かって真実を語りかけ、シカゴだけでなく世界の状況を変えた」人物であったが、「（彼女の名前がシカゴの街に復活するのに）ここまで時間がかかってしまったのは、ほろ苦い気持ちだ」と振り返っている。こうキングが語るように、ウェルズはアメリカの公的記憶の中で長い間忘れ去られていた。しかし近年、ウェルズと彼女の功績の記憶が人々の間で呼び起こされている。その背景には、アメリカで頻発する黒人に対する白人警察による暴力事件や、トランプ政権下での社会的分断状況がある。ほぼ一世紀前に人種平等を唱え活動を展開したアイダ・B・ウェルズに対する昨今の関心は、主に反リンチ活動家としての側面に注がれている。しかし、ウェルズは革新主義期のシカゴにおいて、セツルメント活動を熱心に展開していた社会改革家でもあった。当時、セツルメントはその代表的存在であるジェーン・アダムズのシカゴのハル・ハウスに見られるように、白人プロテスタントの女性社会改革者が主に移民の女性と子どもを対象に活動を展開していた。

#### 【研究目的】

本論では、ウェルズが黒人男性を対

象に行ったセツルメント活動を分析することで、革新主義期シカゴにおいてウェルズが直面した社会改革運動における人種とジェンダーの壁を明るみにしていく。そこから、ウェルズのセツルメント活動が、彼女の反リンチ活動、そしてジム・クロウ（黒人隔離政策）体制下での人種差別との闘いとも密接に関わっていたことを浮かび上がらせていく。

#### 【主要な参考文献】

##### 一次資料

Ida B. Wells, *On Lynching: Southern Horrors, A Red Record, Mob Rule in New Orleans* (New York: Arno Press, 1969).

\_\_\_\_\_, Ida B. Wells, *Crusade for Justice: The Autography of Ida B. Wells*, ed. Alfred M. Duster (Chicago: The University of Chicago Press, 1970).

\_\_\_\_\_, *The Memphis Diary of Ida B. Wells*, ed. Miriam DeCostra-Willis (USA: Beacon Press, 1995).

##### 二次資料

岩本裕子「反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ」『史苑』51巻1号（1991年）、24-42頁。

Patricia A. Schechter, *Ida B. Wells-Barnett & American Reform 1880-1930*

(North Carolina: The University of North Carolina Press, 2001).

Paula J. Giddings, *IDA A Sword Among Lions: Ida B. Wells and the Campaign Against Lynching* (New York: Amisted Press, 2008).

ST. Clair Drake and Horace R. Crayton, *Black Metropolis: A Study of Negro Life in a Northern City* (Chicago: The University of Chicago Press, 2015).

Thomas L. Philpott, *The Slum and the Ghetto: Immigrants, Blacks, and Reformers in Chicago, 1880-1930* (Oxford: Oxford University Press, 1973).

---

発表者：米澤麻美

所属ゼミ：佐藤・廣松ゼミ

タイトル：映画監督アナス・トマス・イェンセンの作家性－『アダムズ・アップル』の映画分析を中心に－

発表概要：1995年にデンマークの映画監督ラース・フォン・トリアーらによって始められた映画運動ドグマ95以降、再びデンマーク映画が脚光を浴びるようになってきた。近年では、スサンネ・ビア、ニコラス・ウィンディング・レフンに代表されるように活躍の場をデンマーク国外に移す監督も増えてきている。一方で、デンマーク国内で制作を続けている監督もいる。その代表は、アナス・トマス・イェンセンである。イェンセンは、脚本家としての仕事を中心ではあるが、監督としても制作をおこなっている人物である。イェンセンが脚本を担当し、スサンネ・ビアが監督した『未来を生きるきみたちへ』(2010)は、2011年のアカデミー賞外国語映画賞を受賞している。

ビアの映画は、たびたびアカデミー賞にノミネートされていることから、この受賞はビアの映画であるところが大きいように思われる。しかし、イェンセンが監督した『アダムズ・アップル』(2005)が、2006年にデンマークのアカデミー賞であるロバート賞の作品賞と脚本賞を受賞しているように、デンマーク国内では監督および脚本家として評価されていると言えよう。イェンセンは現在までに4本の長編映画を制作しているが、デンマーク国内ではすべてがヒットしている。これまで、日本におけるイェンセン映画作品の受容状況は、ビデオスルーや限定的なテレビ配信だけであったが、2019年秋、『アダムズ・アップル』が初めて劇場公開されるに至った。

本発表は、『アダムズ・アップル』の映画分析から、この映画にどのような特徴があるのかを明らかにする。具体的な研究方法は、『アダムズ・アップル』の形式、登場人物の機能、使用されるモチーフなどが、映画内でどのように働いているのかという点から、この映画の特徴を明らかにする。

---

発表者：魏玉清

所属ゼミ：曾ゼミ

タイトル：グローバル化時代における地域文化の復活に関する研究－上海市華涇鎮の黄道婆文化のブランド化の動きを事例に－

発表概要：

研究概要：本研究では、上海における伝統的な綿紡織の起源と密接な関わりのある黄道婆信仰とその関連事物を資源化し、黄道婆文化としてブランド化する動きを事例に、急速に近代化を遂げ、グローバル化に突き進んでいる中国において、伝統的な地域文化の現状を考察する。

研究背景：現代中国における伝統的な地域文化の運命と歴史は、次のように展開してきた。まず、20世紀20年代に、儒教に代表される旧道徳・旧文化を打破しようとする五・四新文化運動が起こるが、一方では、急激な西洋化に対し、知識人や一般民衆の間で民族的危機感が生まれた。このような背景のもと、北京大学で「歌謡研究会」が誕生し、民間に流布する歌謡の採集活動が始まった。続いて広州中山大学を中心に中国民俗学が勃興、発展した。しかし、新中国成立後の50年代後半から30年近くに渡り、文化大革命などの原因により、遅れた風俗を研究すると批判された民俗学は停止状態に陥ってしまった。80年代以降、改革開放政策が実施されて思想が解放されたのに伴い、全国的な範囲で「民俗文化ブーム」が沸き起こり、伝統的な民俗文化を復活させようとする動きが活発になった。本研究では取り上げる綿紡織と関係の深い黄道婆信仰の復活もこの民俗文化ブームの流れを汲むものである。

19世紀後半以降、機械織りされた良質の「洋紗」、「洋布」の流入により、江南地方の伝統的な「土布」（地織綿布）は市場の需要に応えら

れなくなり、その技術を学び、伝承する人は急速に減少していった。それに伴い黄道婆信仰も衰退の一途をたどっていた。

ところが、80年代以降、上海の民俗文化の代表として、綿紡織技芸とそれに密接に関係する黄道婆信仰が見直され、保護、伝承されるようになった。2006年に上海の烏泥涇の黄道婆手工芸綿紡織技芸が国家レベルの非物質文化遺産（無形文化財のこと）に登録された。そして、2016年には華涇鎮（烏泥涇の新しい行政名）で黄道婆文化ブランドが作り出され、黄道婆観光文化祭、黄道婆記念館の機織り体験や烏泥涇手工芸綿紡織技芸伝承基地の設立など、黄道婆文化のブランド化の動きが展開されている。

研究目的：

本研究は、綿紡織業に関する上海市華涇鎮の黄道婆文化のブランド化の動きを通して、資源化された民俗文化が現代社会における人々の精神生活に与える影響を明らかにすることを目的にしている。また、かつて「土布」は嫁入り道具として必須アイテムであったが、ブランド化以降の現地の婚俗において、伝統文化の要素が復活しているのかも注目している。

研究方法と今回の発表内容：

発表者は上海市華涇鎮を中心に現地調査を行い、黄道婆観光文化祭、黄道婆記念館、黄母祠などについて調べてきた。本発表では、文献調査と現地調査を踏まえ、黄道婆という人物の出身と紡織に果たした役割に

関する歴史的解釈や、黄道婆信仰の出現とその変容、黄道婆文化の構築過程について紹介したい。

発表者：魏雪帥

所属ゼミ：曾ゼミ

タイトル：現代満族のエスニシティに関する研究—河北省承德における「文化復興活動」を中心に—

発表概要：研究概要

本研究は現代中国における満族のエスニシティの実態と変容を考察するものである。中国華北部の河北省承德に居住する満族の間でみられる「文化復興活動」を事例に、文献調査とフィールドワークに基づき、中国における少数民族のエスニシティについて検討したい。

研究背景

辛亥革命により、満族による統治に終止符が打たれ、国民国家に移行した。そして、その後の戦乱や政治的動乱などにより、急激な社会変動を経験するなか、満族の伝統社会は大きく変貌を遂げてきた。現在、満族に対する印象は、シャーマニズム、八旗制度、皇帝、チャイナドレスなど清王朝時代の古いイメージに止まっている。20世紀50年代の民族識別工作において、満族はその歴史と民族意識によって一つの少数民族であると認められたが、客観的属性は漢民族への融合が高度に進行しており、端的な民族的特徴が見えないことも事実である。ところが、民族政策が正常化した80年代

に入ると、満族の民族意識が高揚した（平野、1988）。80年代中期以後、満族自治州・郷・鎮が相次いで設立され、民族籍の変更により満族の人口が急増した。さらに、近年は満語教室、満族サイトや伝統的祖先祭祀の復活など「文化復興活動」が見られるようになった。本研究ではこのような活動が満族の人々のエスニシティの活性化に与える影響を分析したい。

先行研究

1.劉正愛（2006）は満族のアイデンティティは複雑性と多様性を持っており、「発源地」としての東北地方の満族と福建省の満族とではエスニシティに違いがあると指摘した。

2.定宜荘・胡鴻保（1993）によれば、北方地域と言語、文化が大きく異なる福建に居住する満族（女真族と清代八旗兵士の末裔）は「征服者」として移住しており、周りの人々に敵視され、北方の満族と比べて民族意識が更に強い。

3.本研究で取り上げる河北省承德は、東北地方を除けば、中国で一番満族が多く分布している。満族の内部構成はより複雑で、いわゆる「純満族」だけでなく、「後改的」（のちに変わった人たち）や「偽満族」と呼ばれる人びとが存在している。彼らは単に功利的な目的だけで民族籍を漢族籍から変更したわけではない。先行研究はあまりこの点に触れていない。本研究では河北省承德の満族の成り立ちの多様性と一体化しつつあるエスニック・アイデンティティに

ついて明らかにしたい。

#### 進捗状況の報告

発表では、2019年9月に実施した一回目の調査で得た「文化復興活動」のアウトラ

インを述べ、「文化復興活動」が満族のエスニシティに与える影響を考察したい。な

お、2020年2月には、承德と「発源地」瀋陽で並行して調査を行い、比較の視点から

両地域における「文化復興活動」の共通点や違いを確認する予定である。

#### 参考文献

定宜荘・胡鴻保（1993）「浅論福建省満族的民族意識」『中央民族学院学報

』93(1):51-66

劉正愛（2006）『民族生成の歴史人類学：満州・旗人・満足』風響社

---

発表者：金瑞蘭

所属ゼミ：中島ゼミ

タイトル：「朝鮮時代漢陽のシティプランニング」の世界遺産登録の可能性と課題

#### 発表概要：1. 研究背景

ソウル市では現代都市の開発圧力と観光による文化遺産の毀損に直面して、「歴史都市の遺産を保護し、その遺産価値の生命力を持続する」ために世界遺産登録を推進してきた。ソウル市では2017年、「ソウル漢陽都城」のユネスコ世界遺産登録に挑戦した。評価の結果は、「不登録」であ

った。「不登録」の理由は、イコモスの評価結果によると、「漢陽都城は、国内レベルでは重要な遺産であるが、グローバルではない。顕著な普遍的価値が不十分である」ということである。「顕著な普遍的価値」の証明は、「世界遺産登録基準」との合致、適切な保護管理計画、遺産の真正性と完全性が満たされている場合のみ登録することができる。ソウル市では、城郭一つだけでは朝鮮王朝の文明の証拠としての価値を十分に導き出すことは難しいということ、また、城郭が全体18kmの中で13kmしか残っていないという点で、完全性の限界があると判断した。したがって、コンセプトと構成資産を変えて、もう一度世界遺産登録に挑戦することにした。したがって、その挑戦に必要な提言をしてみたい

#### 2. 研究目的

朝鮮時代の漢陽は、1394年、朝鮮王朝の都に定められた以来、600年間以

上政治、経済、文化の中心としてその機能を維持してきた。儒教文化の影響を受けた東洋の都市構造において最も重要なのは、宮殿、宗廟、社稷、官庁と市場、都城と道路網の建設過程である。これら諸要素がどのような原則の下で配置されているのかを探るのが、都市構造の特徴を理解する方法である。初期の漢陽建設は、「背山臨水」という伝統的な風水思想と、中国の城郭都市の建設原則によって建設された。現在ソウルには、このような伝統的な都市構造の原型がそのまま残っている。この

ような都市構造は、現在ソウルの基本骨格として、都市計画の基準になっている。この研究は、朝鮮時代の漢陽が、東アジア都城の普遍性と伝統的な風水思想に基づいて建てられ、どのように変化し、再生してきたかを都市計画の観点から考察してみたい。二番目に、韓国、中国、日本の風水思想と王都建設過程を比較して、「朝鮮時代漢陽のシテイプランニング」の世界遺産登録の可能性を導き出すことを目的としている。これを通じて 14 世紀末に行われた王道建設のアイデアが現在まで残っている独自の意義をさがしてみたい。

---

B.ポスター

発表者：高橋航平  
所属ゼミ：重定ゼミ

タイトル：プログラミング × エンターテインメント –AI アルゴリズム・ゲーム制作・センサーカメラの研究を通して–

発表概要：

重定ゼミでは、それぞれのゼミ生が異なるテーマで個人研究を行っています。今回のポスター発表では、それぞれの研究を一つにまとめて発表を行う予定です。

・コンピュータオセロにおける探索・推論アルゴリズムの研究（高橋）  
20 世紀中盤頃に世界初のコンピュータ（電子計算機）が誕生してから早くも 70 年以上が経過し、コンピュータはすっかり私たちの身近な存在になった。このコンピュータの短い歴史の中で、しばしば注目を浴びてきたのが「人工知能（AI）」である。AI は様々な分野で利用されているが、私が今回の研究で題材としたのは、「オセロ（リバーシ）ゲーム」である。もちろんオセロの AI は強力で、1997 年の時点で世界チャンピオンに勝利している(The Associated Press, 1997)。では、このように人間を凌駕するオセロ AI の思考回路はどうなっているのだろうか？今回の発表では、研究で自作した様々な思考パターンを持つ AI を実際に動かしながら、それぞれのパターンの強みや弱み、そして具体的なアルゴリズムなどにつ

いて考察したいと考えている。

【参考文献】

The Associated Press. (1997). Computer Beats Champ Again - This Time in Othello.

Retrieved from

<https://archive.nytimes.com/www.nytimes.com/library/cyber/week/080997/othello.html>

・2つの立場から見るゲーム開発（佐巻）

私は、実際に市販されているゲームが完成するまでのプロセスや、その中での技術について、3年生の後期から作った 3D 迷路ゲームに、RPG 要素を組み込んでいくことで研究している。

今回の発表では、主に以下の三点について詳しく説明していこうと思う。

まずは 3D 環境を表現するためのプログラム、次に RPG を作るうえで重要となる要素、そして 1 つのゲームを作り上げるプロセスについてである。

上記三点について、ゲームをプレイするプレイヤーの立場と、作り上げていく立場の二つの立場で、それぞれの見え方と、それぞれが感じる重要性などの相違点をあげていくことで述べていく。

・センサーカメラで“新しい”写真撮影（後藤）

エンターテインメントのシーンで利用されることが多い kinect の持つ機能を学習して

将来に生かしたいと考え、kinect v2



を使った写真撮影を発表する予定です。kinect v2 はセンサーカメラで、Depth データの取得、音声入力、表情や骨格の取得、その他の多機能センサーを搭載しています。言語は C++で、そのうちの骨格の取得をプログラムして、ピースポーズを認識したらシャッターが下りる仕組みです。最終的には NFL の AT&T スタジアム内にあるアクティベーションを目指します。

---

発表者：中澤一輝

所属ゼミ：中島ゼミ

タイトル：森林破壊によるゾウと人間との衝突 ～エコツーリズムの可能性～

発表概要：

森林破壊によるゾウと人間との衝突～エコツーリズムの可能性～

インドネシアではオランダ統治下にあった時代から、国内移住政策が実施され、人口過密地域から過疎地域に恒久移住させインドネシア内の人口の均衡化を図り、諸問題を解決する動きがあった。その過程でスマトラ島への移住も実施された。

今回はスマトラ島の一つの州であるランブン州を例に取り上げたい。

ランブン州はスマトラ島の南端に位置するインドネシアの州であり

、2014 年時点で面積 35,376 km<sup>2</sup>、人口約 797 万人である。ブンクル州、南スマトラ州と隣接する。オランダ植民地領時代の 1905 年に最初のジャ

ワ人移民がランブン州にやってきた。なぜならジャワ島は小さい島であるが人口密度が高かったため、貧困軽減のためにオランダ植民地政府が「コロニサシ政策」によって送ったからだ。その後ジャワ人移民の数は急速に増えた。1970 年代以降スハルト政権は「トランスミグラシ政策」を行ない、組織的にジャワその他の人口の多い州からランブン州その他への移住政策を実施した。そのため現在ジャワ人は人口の 60%を占め、ランブン生まれのジャワ人は 11%である。ジャワ人は移民、ランブン人は土地の持ち主という関係が作られた。しかしランブン人は耕作を好まないため、ジャワ人を小作人として使用したり、ジャワ人に安く売ったりした。稲作の普及のため政府はランブンに灌漑設備を導入した。その結果ランブン人の土地の周縁化、また政治的、文化的にもランブン人は周縁化され、ランブンでの政治はジャワ人が握るようになった。

インドネシアにおける森林破壊はかねてから国際社会において問題視され、特にスマトラ島の森林破壊は顕著である。これにはインドネシアの歴史的背景が大きく関係している。1970 年代以降の政府の開発政策により、スマトラ島の熱帯雨林は著しく減少し、スマトラゾウ、スマトラトラ、オランウータンなどの野生動物も生息地を奪われ、絶滅危惧種となった。ランブン州の広大な森は急速に伐採され、アブラヤシプランテーション、稲作地へと転換された。

1985 年設立されたランブン州ワイカ

ンバス国立公園（1000ヘクタール）に野生の象を調教し人との共存を目指すために象訓練センターが設立された。現在、訓練中の象は約40頭、野生ゾウは数百頭いると考えられており、訓練センターの象を用いたエコツアーが催行されている。ワイカンバス国立公園内に象訓練センターが設立された背景には、スマトラ島全体で野生のゾウによる被害が多くなり、被害を与えるゾウをワイカンバス国立公園周に移送し、野生のゾウと人間との衝突の問題を解決しようとしたことがある。中島ゼミでは2017年北スマトラ州のタンガハンでのゾウのエコツアーに参加しているので、今年ワイカンバス国立公園での経験を比較し、森林破壊の進行、それに関連するゾウと人の対立や解決策としてのエコツアーリズムなど一連の流れを理解し今後について考える。

---

発表者：飯田祐希子

所属ゼミ：佐々木一ゼミ

タイトル：スポーツから見る東亜新秩序-極東選手権大会を事例に-

発表概要：

1938年、大日本帝国・満州国・中華民国（日満華）の三カ国における共同体形成構想としての東亜新秩序が発表された。東亜新秩序は三カ国の文化、経済、政治全般にわたる統合の試みであり、この構想はアジア・オセアニアで欧米列強を排し、日本

を盟主とする大東亜共栄圏の構想へとつながっていった（藤岡，2008）。しかし、先述した分野に先行し、スポーツの分野において類似の構想が存在していた。極東選手権大会（以下：極東大会）は、12回開催されたアジアを中心とした国際大会で、フィリピンの宗主国であったアメリカのYMCA体育主事エルウッド・ブラウンが提唱した事により始まる。1908年に行われたフィリピンのマニラ・カーニバルを前身とし、1913年には中華民国、日本、フィリピンを主要参加国として、マニラにおいて第1回大会が開催された。極東大会と銘打っていたものの、実際の運営主導権はアメリカ人が握っていた事や、植民地であったフィリピンや半植民地状態におかれていた中国と同等に扱われる事を嫌った日本は、当初からこの大会に乗り気でなかった。そのため「極東大会をアジアの手で」のスローガンのもと、日本は極東大会の運営から欧米勢力を切り離し、アジアの自主運営と各国の結びつきの強化を目指すようになった。第六回極東選手権大会（1923年日本で開催）からは、日本主導での大会運営が行われ、極東大会は名実ともにアジアの繁栄と友好の象徴となるはずであった。しかし1931年に満州事変が起こると、満州国参加問題をめぐって日中の関係悪化がスポーツにも及んだ。東洋の盟主としてアジアの秩序をつくりかえようとする日本と、それを阻止する中国の間に入った亀裂は、1934年には極東大会を終

焉に導いた。こうして極東大会は幕を下ろしたが、日本はスポーツ界に新たな秩序をつくるべく東洋体育大会の開催を画策した。極東各国を巻き込んで組織されたこの大会運営組織は、1937年の開催を目指して活動していく。欧米を排除しアジア人の手による自主運営を掲げた国際体育大会の構想は、極東大会から東亜大会への変遷の中で、東洋民族の融和や欧米への対抗等の思想とも繋がっていった。その経緯は、日本を太平洋戦争へと向かわせた東亜新秩序並びに大東亜共栄圏構想と極めて似ている。しかし、スポーツの分野では20年も先駆けて同様にを推し進めていたことになる。そこで本発表では、東亜新秩序と極東大会の類似性・相関性を分析し、いわゆる文化事業における政治性を提示していきたい。

#### 参考文献

高嶋航 「戦時下の平和の祭典-幻の東京オリンピックと極東スポーツ界-」 『京都大学大学院文学部紀要』49号、2010年、pp.25-72。  
高嶋航 『帝国日本とスポーツ』 塙書房、2012年。  
藤岡健太郎 「『東亜』の『解放』と『統一』：『東亜新秩序』と『大東亜共栄圏』の連続と断絶」 九州史学研究会編『境界からみた内と外』 岩田書院、2008年、pp.271-294。

所属ゼミ：中山・今泉ゼミ

タイトル：外国につながる児童への実践—横浜市立潮田小学校の取り組みから—

#### 発表概要：

本報告では、外国につながる児童が多く在籍する横浜市立潮田小学校の取り組みを紹介する。同校ではどのような取り組みのもと、多様な児童や保護者を受け入れているのかを明らかにし、取り組みが児童や保護者にどのような影響を与えたのか考察したい。報告者は、ゼミ合宿で横浜市鶴見区在住の日系人へのインタビューを行ったことをきっかけに、横浜市立潮田小学校における外国につながる児童への取り組みに関心をもった。調査として、潮田小学校校長緒方克行氏と潮田小学校に通う児童、卒業生ならびにその家族にインタビューを行った。

鶴見区は在留外国人の割合が4.7%と、全国平均の2.9%に比べて高い。潮田小学校では、2019年4月時点で全校児童数694名中、19カ国約150名の外国につながる児童がいる。特徴的な取り組みとして、国際教室と潮田YYがある。国際教室では、授業を受けるための能力が十分でない外国につながる児童に、日本語支援を行っている。潮田YYでは、外国につながる児童がルーツを持つ国の文化を体験する活動を主に行っている。この活動は、外国につながる児童の保護者が中心となって運営している。10月には各地域の遊びを体験する時間があり、外国につながる児童が、

---

発表者：中村綜

日本の児童に彼らの文化を紹介する。これらの取り組みと学校生活の実態から、潮田小学校は「人権教育」の枠組みの中でこれらの取り組みを行っていることがわかった。外国につながる児童に対しては、日本に「適応する」だけでなく自分の「ルーツ」を考えるきっかけを与える取り組みなどが行われ、児童の人権が尊重されていることがわかる。外国につながる児童だけでなく日本人の児童も、潮田YYなど学校生活の中で楽しく様々な国の文化に触れることができ、お互いを知ることで相手を尊重する機会が作られている。日本語のレベルが様々な児童がいる中で、児童は助け合いながら学校生活を送っている。教室では、日本語が離せない児童がクラスに入ってきて、周りの児童が、通訳をするなど、コミュニケーションを取り合う姿がみられる。このように彼らには、助け合う姿勢が学校生活の中で自然と身に付いていることが分かる。また、保護者の間でも外国につながる人への助けがあることがわかった。登校時に横断歩道で行う旗当番では、外国につながる児童の保護者が工場勤務で朝が早い場合に、他の保護者が当番を交代することが日常的に行われている。町内会では、通訳や声かけなど、彼らが参加しやすいような周りからの気遣いがある。潮田小学校の特徴として、外国につながる児童への取り組みが人権教育という枠組みの中で行われ実践されていること、その実践により児童や保護者の間で自発的に、助けると

いう行動が生まれていることが明らかになった。本報告ではこれらの潮田小学校の取り組みが、児童や保護者にどのような影響を与えたのか考察したい。

---

発表者：新井亮太

所属ゼミ：種田・岡村ゼミ

タイトル：現代建築の巨匠、大江宏と現在に通じる建築観について

発表概要：

場所論ゼミでは法政大学デザイン工学部建築学科の創設者である大江宏と、彼と関連付けられる著名な建築家を数名取り上げ、ポスター形式で要約し発表を行う。発表の目的は、大江宏の建築観を学ぶことで現代の建築の在り方に対する問題提起を行うことである。

このテーマ設定の経緯としては主に二つの理由が挙げられる。一つが、今年度春学期のゼミ活動のテーマが建築家についてであり、学会を通じてこれまでの活動内容を総括すること。もう一つが、現在行われている55・58年館の取り壊しをきっかけとして、建築学科の創設者であり当館を設計した本人でもある大江宏という人物に焦点を当て、私たち法政学生に比較的身近な人物から建築という文化についてより広く知ってもらおうことである。

発表では大江を含めて主に三人の建築家を中心にまとめていく。まず一人目は全体の中心人物となる大江

宏についてである。戦前から戦後にかけて激しく移り変わっていく時代の中を生きた建築家の一人であり、その時代の流れと共に西洋建築と日本建築という二つの潮流の中でより良い建築の在り方を目指し、葛藤を抱えながらも活躍を続けた人物である。

“時代性”というキーワードにおいて対比されるのが二人目に取り上げる丹下健三である。丹

下は日本におけるモダニズム建築の巨匠であり、大江とは大学生時代の同級生かつライバルであった。同時期に並行して活躍することとなる彼らであったが、その建築理念は、実際に建築を利用する個々人に合わせた設計をしようとする大江と、個人よりも時代や社会のニーズに応えた建築を作り上げていく丹下というように必ずしも一致するものではなかった。ここではこの対比をより掘り下げて調査した後、現代の建築にはどちらの方針がより適応し得るかを検討していく。

先述したように、大江はモダニズム建築が台頭する時代の中で日本建築の国際的価値を高めるためには単なる西洋の模倣では不十分であると、日々思考を巡らしていた。この問いは当時の建築家たちに課された最大の課題の一つであったが、これに大江とは異なるアプローチで答えを出そうとした建築家がいる。それが、三人目に取り上げる、大江の師に当たる堀口捨巳である。大江と堀口の間では日本の伝統を重視するこ

とを始めとした共通点が存在する一方で、表現方法や建築構造において相違点が見られる。根底には同じ日本建築の価値を高めるという目標あるにも関わらず、何故思想は分化していったのか。その理由を時代背景や彼らの原風景を基に解明していく。

以上の三人物について、適宜彼らの手掛けた代表建築や用語の解説、彼らに影響を与えた他の建築家の発言などを参考にしつつ比較を行っていく。

---

発表者：江口鈴奈

所属ゼミ：甲ゼミ

タイトル：人々に寄り添う道

発表概要：

私たちは通学途中で市ヶ谷駅もしくは飯田橋駅から大学までの道を通る時、なぜか地域の活気を感じることができない。私たちが通う法政大学の周辺は飲食店・病院・オフィスなどが立ち並ぶエリアであり、多様な属性の人の生活圏であるが、機械的に個々の生活を営んでいる印象を受ける。私たちはその理由は市ヶ谷駅から飯田橋駅までをつなぐ道に原因があるのではないかと考えた。市ヶ谷駅から飯田橋駅までをつなぐ道がただ場所から場所へ移動する通過点としてのみ使われているのではないだろうか。そこで、私たちはどの道を使っても目的地に着くことができればそれでよいのか、この道だからできることは何かについて考え、

市ヶ谷駅から飯田橋駅までの一本道を利用者にとってもっと魅力的な場所にしたい。そして、私たちはこの研究の目的を「市ヶ谷駅と飯田橋駅を結ぶ一本道をそこに訪れる人にとって愛着を感じる場所にすること」と定義した。

この目的を達成するために、私たちは2つの調査と1つの実験を行う。まず、調査1としてユーザーの特性を明らかにする。なぜなら、この道の利用者の特性やその人が抱えている課題を知らなければ、利用者が訪れたいと思う場所を検討することができないからだ。そのために、市ヶ谷駅と飯田橋駅をつなぐ道を利用する人の人間観察とインタビュー調査を行う。市ヶ谷駅から飯田橋駅をつなぐ道で、時間を朝・昼・夕方・夜に分けてどのような人が利用しているか調べる。ユーザーの年齢・性別・職業・この道を利用する目的・持ち物・人数・歩くスピード・目線について観察する。また、インタビューに関しては質的研究の手法を用いて、道とのかかわり方とその道を利用するときの問題点を聞き出す。

次に、調査2として、愛着を感じる場所にするための仕掛けにどんな要素があるのかを明らかにする。なぜなら、その土地らしさを出した道でないといざわざ足を運びたいと思えるような道を作ることはできないからだ。そのために、市ヶ谷駅から飯田橋駅をつなぐ道の独特な味わいを調べる。道を利用して五感で感じることができる音・景色・匂いと建物

・地形・自然などの道の周辺環境について調べる。調査方法としては、フィールドワークとインタビューで調査する。

最後に、調査1と調査2を基に、実験として市ヶ谷駅と飯田橋駅を結ぶ

新たな道の模型を作成する。なぜなら、この研究の目的が達成されたかどうかを確かめるためには、目に見える形でアウトプットする方が良いと考えたからだ。模型を作成し、目的を達成できたか考察を行う。

以上の実験・調査を通じて、ユーザーに寄り添った唯一無二の道を提案していきたい。

## C.映像

発表者：御厨智也

所属ゼミ：稲垣ゼミ

タイトル：擬音語世界 -音の収集と再構築-

発表概要：

私たちの周りには無数の音で溢れている。雨が降った時には「ポツリポツリ」と音が響き、上がったと思えば遠くで鈴虫が「リンリン」と鳴いている。世界の「そのままの」音が耳に直接入りこみ、目で見、皮膚で感じて人は音を認識している。私は日常に溢れる音について、特に擬音語に焦点を当てた映像作品を制作した。

1960年代末、カナダの現代音楽作曲家である R.マリー・シェーファー<sup>1)</sup>により、音風景を意味する「サウンドスケープ」<sup>2)</sup>が提唱された。その考え方とは地球上の様々な時代や地域の人々が音の世界を通じて日常的な環境とどう関わっているのかを問題とし、それぞれの音環境を個別の文化的事象として位置付けるというものである。つまり音を聴く行為によって自ずと現れる意味世界とも言える。

私はこのアイデアに基づき音を風景の構成要素と捉え、間の関係性を意識しながら音を「聴く側」にまわった。すると新たな発見があった。耳で聴いた際に頭の中でその音がどう響いたかを言語化する瞬間が現れたのだ。上述した「ポツリポツリ」という言葉を例にとると、耳で聴い

た時には「ポツリポツリ」と音が響いている訳ではないのだが、雨の音だと認識し、人にこの自然音を伝える際、言語化され生音から形を変えて現れる。擬音語とは、自然界の音響を言語音で真似て表している。

ところで、風景の一部としてデザインされた擬音語によって表された音は果たして本当にその姿になりたかったのだろうか。もしこの世の音が全て擬音語に変換されたら人は音に対してどのように感じるのか、この作品は身近にある擬音語を通して私たちの環境を見つめ直すきっかけとなる。

用意した映像は四つ、身近な埼玉県風景の中から、雨が降った日の公園で環境音に耳を傾ける様子や、緑豊かな森の中で木々の揺れや砂利を踏む音、鳥の鳴き声などを選び、編集作業で擬音語により意識に落とし込む映像作品を制作した。また人が現れる画と現れない画を交互に見せる事で音を聴く行為に主観性と客観性を持たせ、普段とは違った視点で音と接する事ができるよう意識した。

言葉によって認識される擬音語世界。何気なく耳から離れていく音が形を変えて現れるかもしれない。

1) R.マリー・シェーファーは 1933 年生まれ。オーケストラ作品からマルチ・メディア作品など幅広いジャンルを手掛けるだけでなく、サウンドスケープの提唱者としても世界的に注目されている。  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/11000464642>

2 (2019.11.11)

2) シェーファーにより提唱された「Landscape=風景」と「Sound=音・音響」を合成した造語。  
[http://www.seiryo-u.ac.jp/u/education/gakkai/h\\_ronsyu\\_pdf/2\\_2/p35\\_taninaka.pdf](http://www.seiryo-u.ac.jp/u/education/gakkai/h_ronsyu_pdf/2_2/p35_taninaka.pdf)  
 (2019.11.11)

発表者：杉浦亜門

所属ゼミ：稲垣ゼミ

タイトル：僕は今、水を無駄遣いしている。現代美術パフォーマンスの実践と記録

発表概要：

水でびちょびちょになりながら水彩画を描きたいと思った。画用紙の上の絵の具も流されてしまっと思うように描けないのが楽しそうだった。これが原点だ。やってみた。気持ちが良い。出来上がった絵よりも、行為そのものの気持ち良さが勝った。その時誰かが言った。「水の無駄遣いはやめよ。」私は言った。「気持ちが良いから無駄じゃない。」また彼らは言った。「いや、無駄だよ。」私は言った。「ふーん。無駄か。」

子どもの頃から「無駄にしてはいけないモノ」と教えられるにもかか

わらず、僕らは水を毎日約 186 リットル使っている注1。

そう、僕らは水を無駄遣いしている。この作品は、私自身が雨、シャワー、ホースの水によって濡れながら水彩画を描いている映像(85分)と、それで出来上がった3つの絵画で構成

されている。過剰な編集やコメントは省き、出来る限り自然な風景記録のように見えるよう演出している。

過去にも様々な現代アーティストが、一見無駄な行為を基として作品

を生み出してきた。ランド・アートのアーティスト、ロバート・スミソンの《Spiral Jetty》という作品は、

1970年にユタ州のある塩湖に作られた渦巻き状の堤防のようなもので、水位の昇降によって数年に一度しか

現れず、豊富なバクテリアによって分解されていくなどの条件を利用し、アートの商品化に彼は反発した。

しかし今では観光地にもなり、保存活動も行われてしまっていて、全く無駄になっていない注2。オノ・ヨーコの作品《Cut Piece》ではステージ

上にアーティスト本人が座り、観客はオノの衣服をハサミでカットし持ち帰ることができる注3。ゴードン・マッタ=クラークの作品

《Splitting》は、建物を縦に真っ二つに切断している注4。

オノ・ヨーコの服の一切れが今では高価になっているかもしれない。真っ二つの家も今ではどうなっているのだろうか。そんなことを彼らは気にするだろうか。

お金、時間をはじめ、友達や自分

お金、時間をはじめ、友達や自分



自身の振る舞いまでも無駄かどうかを分別する現代社会。無駄学の研究者であり、無駄を削減することを推奨する西成活裕は「無駄の定義は明確でない」と言う。(西成

2008)。しかし、私たちは他者に対して無駄であると批判する。「その交友関係無駄じゃないの？」などと人は非難する。けれども、本人にとっては有意義な人間関係かもしれない。その人自身も無駄だと思っても、いつか時が経って素晴らしい友人だったと気が付くかもしれないだろう。

参考文献

西成活裕『無駄学』新潮社、2008年注

1. 水まわりから環境を考える  
<https://jp.toto.com/greenchallenge/value/q02.htm> (2019.10.31)
2. Robert Smithson, Spiral Jetty  
<https://www.khanacademy.org/humanities/ap-art-history/later-europe-and-america/modernity-ap/v/smithson-jetty> (2019.11.11)
3. Yoko Ono, Cut Piece  
[https://www.moma.org/learn/moma\\_learning/yoko-ono-cut-piece-1964/](https://www.moma.org/learn/moma_learning/yoko-ono-cut-piece-1964/) (2019.11.11)
4. Gordon Matta-Clark  
<https://kobalog.jp/burart/2018/06/gordon-matta-clark/> (2019.11.11)

---

発表者：長田百花  
所属ゼミ：鈴木ゼミ  
タイトル：“私たちは日本人だ”台

湾人元日本兵の終わらない戦い

発表概要：

世界の様々な国と地域の中でも特に親日的といわれている台湾。しかし、1972年の日本と中華人民共和国の国交正常化により、台湾と日本との正式な外交関係は未だ断絶されたままである。

第二次世界大戦中、台湾は日本の植民地統治下にあった。戦局が悪化する中、日本人として日本のために戦争に参加した若者たちがいた。兵士や軍属として血や汗、涙を流した人々がいた。しかし、その歴史は人々の記憶から次第に失われようとしている。

私たちは、日本と台湾に今も暮らす台湾人元日本兵の方々を訪ね、戦争中の体験や戦後補償の問題、そして未来へのメッセージなどを伺った。

1945年8月14日、日本政府はポツダム宣言を受諾した。翌日、玉音放送により日本の降伏が国民に伝えられ、第二次世界大戦が終結した。日本政府はこの8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とし、毎年全国戦没者追悼式を開催している。第二次世界大戦の日本人戦没者に対して行われる追悼式である。

当時日本は現在の領土に加え、樺太や朝鮮半島、遼東半島、そして台湾と、アジア各地に領土を広げていた。台湾では、皇民化政策が実施され、日本語使用を推進する国語運動、日本式姓名に改める改姓名など、徹底した同化政策が行われた。戦線が拡

大すると兵力不足を補うため志願兵制、徴兵制が実施され、約 21 万もの若者が日本人として戦争に参加し、約 3 万人が命を落とした。

戦後、日本では「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が制定され、軍隊に所属した人々に対し戦後補償がなされてきた。しかし同法に定められた国籍条項により、日本国籍を失った旧植民地の人々はその対象から除外された。日本人戦死者遺族一人あたりの遺族年金は、昭和 27 年から 60 年の間だけで累計約 1300 万円となった。

1977 年、台湾人戦死者遺族・戦傷病者が日本政府に対し一人あたり 500 万円の支払いを求める訴訟を起こした。しかし、その請求は退けられてしまった。1987 年、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」の活動により、議員立法で台湾人戦没者遺族等への補償が決定され、90 年代、日本赤十字社を通して台湾人元日本兵や遺族へ弔慰金が支給された。しかしその額は一人あたり 200 万円。日本国籍を失ったために、今も日本人に比べ十分な補償が受けられぬままとまっている。

台湾、高雄市に台湾人元日本兵を弔う戦争と平和記念館がある。歴史的事実を後世に伝えるため、台湾人の戦争経験をまとめた資料館や碑文などがある。しかし、戦後 70 年以上が経った今、第二次世界大戦の経験を語る事ができる方は年々減少している。

このような体験や歴史、そして未解決の問題を過去のものとしては

ならないのではないか。また、これからの若者たちにこれらの人々の思いを語り継げるのは、私たちの世代が最後なのではないだろうか。そんな思いから、映像制作に取り組んだ。この作品を通して一人でも多くの方がこの歴史を学び、考える契機となることを願っている。

D. インスタレーション

発表者：高継嘉  
 所属ゼミ：衣笠ゼミ  
 タイトル：人間の住む海

発表概要：  
 〈背景と動機〉

私たちはゼミ合宿の一環で四日市公害についてフィールドワークを行い、四日市ぜんそくの被害の大きさを目の当たりにし、当事者の体験を聴いた。その後のゼミ活動でディスカッションを重ねるなかで、海洋プラスチックごみによる海洋汚染問題に関心を持つようになった。

700 種もの海洋生物が海洋プラスチックごみによる被害で死傷しているという事実

が伝えられると、世界に波紋が広がった。今や世界中の海にはプラスチックだけでなく、マイクロプラスチックまでもが蔓延し、問題はさらに深刻化している。2050 年には海洋プラスチックの総量が海洋生物を上回ると予測されており、自然環境への重大な脅威となっている。

私たちは、世界で環境保護の意識が高まっている中で、日本人の環境に対する意識の低さに着目した。日本のプラスチックリサイクル率は 84% と世界的にもトップクラスではあるが、実際には年間 150 万トンものプラスチックをリサイクルごみとして海外に輸出しており、実質的にはリサイクル率が高いとは言えない。さらに主な輸出先であった中国が昨年輸入を停止し、他のアジア諸国でも規制は進

みつつあることで、いよいよ日本でもプラスチック削減の深刻性を一層理解し、生活の中で実践する必要性が切迫したものとなっている。

しかし、現状として日本人の環境保護意識は低い。海洋汚染による生物への悪影響について、「生物がかわいそう」というのは一般論であるものの、その感情がプラスチック排出量を減らす行動に繋がることは少ないだろう。それだけでなく、おもてなし精神による過剰包装など、削減できるプラスチックが毎日のように生産されている。

私たちはこの発表を通じて、環境に対する意識、とりわけ海洋プラスチックによる海洋汚染の深刻性を実感してもらうために、海で海洋生物が体感している現状を、人間の世界に置き換えて表現する。

〈目的・意義〉

本研究の目的は、①体験者の「物事を批判的に考える思考」を養うきっかけ作りをすること、②体験者がこの発表を通じて海洋汚染の深刻性をより深く理解し、行動に繋げる後押しをすること、の二点である。

本研究の意義は、海洋生物の置かれている環境を、陸上の人間世界と海洋世界とを置き換えることでリアルに体感でき、その結果体験者が問題意識や当事者意識を一層持ち、海洋プラスチック問題をより身近に、批判的に考えることができる、という点にある。

〈発表内容〉

海洋生物が置かれている現状を人間の世界に置き換えて表現する。

エリアを3つに分けそれぞれ

- 1、子どもの誕生
- 2、家庭での生活
- 3、死後の人体とする。

〈到達地点〉

- ・海洋生物の現状を人間の世界に置き換えて体験することによって、批判的に物事を考える体験をしてもらう。
- ・人間が海洋生物の立場に立つことで、海洋プラスチック問題の深刻さを当事者問題として考え、海洋汚染問題の深刻さに問題意識を持ち、行動を起こすきっかけを提供する。

---

発表者：正岡由衣

所属ゼミ：衣笠ゼミ

タイトル：海外から見た日本人と日本人から見た日本人

発表概要：

『動機』

私たちはSAを含むこれまでの海外経験のなかで、「〇〇人は～だ」というイメージや固定概念が、そうした人々と実際に接するなかで覆されるという経験をしてきた。また私たちは、ゼミの活動を通して、自分たちがもつ「日本人は～だ」という固定概念と「自分自身」との間にはギャップがあることを学んだ。そこで、「外国人から見た『日本人』」と、「日本人が考える『日本人』」「日本人である私」との間にあるギャップをとらえ、それを可視化したいと考えた。

『目的』

来場者に、自分が持たれているイメージ、自分が持っているイメージ、さらに自分自身との間にギャップがあることを体感してもらうことで、自分が無意識に抱いている偏見を意識してもらう。無意識の偏見を認識することにより、固定概念に縛られず新たな視点を得るきっかけとする。

『発表内容』

海外の人々が日本人に持つイメージを具体的な場面に置き換えて実施したアンケート調査をもとに、そうした場面を再現し、「ある1日」を体験する形で実際のデータを見ながら巡ることができる空間を作る。

『体験してもらう内容』

1. 待ち合わせ場所と時間のLINEを受け取る。

例) 待ち合わせと場所と時間のLINEの掲示物を作成し、来場者に見てもらう。まずは自分だったら何分に着くかを考えてもらう。

そのうえでアンケートの調査結果（外国人が思う日本人のデータと、日本人が思う日本人のデータ）を見てもらい、自分の考えとのギャップを感じてもらう。

2. 電車内で空のペットボトルと遭遇。

例) 椅子を用意し来場者に座ってもらう。椅子の下に空のペットボトルを横にして置いておく（ゴミの設定）。来場者にこのような場合ペットボトルを拾いゴミ箱まで持って行くかを考えてもらい、自分の考えとアンケートデータを比較してもらう。

- 3.電車内で化粧をするかどうか（男女不問）。
- 4.落とし物を見つける。
- 5.電車の運賃表と地図を交互に見ながら明らかに困っている人に遭遇。
- 6.待ち合わせ場所に到着。
- 7.狭い道路の横断歩道にさしかかる。
- 8.大教室の授業に参加。
- 9.洋服屋に行く。
- 10.レジの列に並ぶ。

『意義』

訪日外国人が年々増え続けている現状を考えると、今後はこれまで以上に、日本国内でも様々な国の人々との関りが増えて行くことが予想される。ステレオタイプや偏見は常に存在し、それをなくすことは不可能だが、自分自身がそれをもっていることを自覚し、また自分もその対象になっていることを体感することは、私たちが今後のグローバル化社会を生きるうえで大切な気づきとなりうる。

---

発表者：山口彩奈

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

タイトル：明日が最期なら何をしますか ～「平和」に生きる私たち～

発表概要：

平成から令和になりました。時代は常に変化していきます。しかし、時代の変化と共に忘れてはいけないこともあります。私たち佐々木直美ゼミは“世界遺産に学ぶ”というテーマで研究をしています。その中で

負の遺産に焦点を当て、特攻という悲しい歴史を世界遺産として人々の記憶に残せないだろうかと考えました。たくさんの特攻隊員は鹿児島という地から飛び立ち、命を落としていきました。そんな鹿児島には知覧特攻平和会館という貴重な資料館があります。このような歴史を後世に伝えていく為、知覧特攻平和会館を世界記憶遺産に申請するという手段をとっていることを知りました。この取り組みを現代の若者である私たちが代表して特攻の真実を伝えたいと考え、戦争の時代を風化させないため、平和を考え直す機会として、特攻隊について研究を進めてきました。

その過程で、法政大学からも特攻隊員として戦地に向かった学生たちがいたこと、私たちと変わらない年代の人たちが特攻で亡くなっていたことを知りました。そこで、より深く特攻隊について学ぶためにも、鹿児島県の知覧にフィールドワークへ行きました。三角兵舎や掩体壕など当時の生活や戦時中を思い出させるような遺構で貴重な経験をしました。また、語り部の方の講話や特攻隊員の遺書などから親子の絆、家族愛を最も強く感じ取ることができました。家族や大切な人に当てた手紙や遺書はどれも前向きな内容であり、悲しませないように、心苦しませないように、「喜んで特攻に行って参ります。」と書かれていました。特攻について学ぶ前は、当時の狂信的、高圧的な雰囲気に着目し、特攻隊員の心理を一括りに考えていた私た

ちですが、彼らにもいろいろな想いがあり、家族のため、日本のため、将来のため、様々な想いで特攻に向かったことを知りました。今回の学会では、現在の平和が多くの犠牲の上に成り立っていることを知っていただき、戦争の悲惨さ、平和のありがたさ、現代に生きるありがたさを改めてご来場の方々に実感していただきたいとの思いから、発表内容を検討しました。また、フィールドワークを通して最も強く感じた、親子の絆、家族愛について見つめなおすきっかけにしていきたいと考えています。そこで、私たちのメッセージを伝えるために、当時の写真や遺書、兵器や歴史の説明、特攻・戦争の結果などをインスタレーション形式で提示します。単なる当時の説明あるいはフィールドワークの報告ではなく、実際にご来場者自身が考え、感じ、このインスタレーションの前と後で、少しでも心に変化を起こし、これから先の選択や行動に移していただけることを今回の学会の私たちの目的とします。

---

発表者：西野佳奈

所属ゼミ：桐谷・熊田ゼミ

タイトル：嘘と真実

発表概要：

桐谷・熊田ゼミは、文献および現代アートを通じて、インターカルチュラルリティや多文化共生社会について考えるゼミです。今年度の国際文化情報学会では、現代の、主に日本に

おける社会問題に注目し、「嘘と真実」というテーマでインスタレーションの発表を行います。

私たちは、学校や就職活動など社会における様々な場面での服装や髪色の制限、男女やマイノリティの差別を経験しています。SNSの普及によって、多くの人が承認欲求や自己顕示欲を助長するコミュニティの中に存在しています。そしてこの抑圧的な社会によって、本来の感情を表に出せない人、自分を偽っている人、没个性的な人が多くなっているように思います。桐谷・熊田ゼミのゼミ生たちはそれを問題視し、様々な社会階層の、多種多様なバックグラウンドやアイデンティティ、パーソナリティを持つ人々が、それぞれ自分らしく生きることのできる社会こそ、多文化共生社会だと考えます。

桐谷・熊田ゼミでは、国際文化情報学会に加え、春学期（7月上旬）にも毎年インスタレーションの発表を行っています。今年度春学期に行ったインスタレーションでは、私たちが日々仮面を被って生きているというその姿を、実際の仮面を使うことで表しました。その仮面をいくつも、暗幕で覆ったグリーンボードにかけ、その下に紙に書かれた本音を貼り、仮面をめくると様々な本音を見ることができるという構成でした。仮面をかけたグリーンボードを、あえて人が多く集まる、机と椅子がある外濠校舎の共有スペースに設置したことで、普段私たちが隠している本音の部分と、実際の生活における私たちの言動との対比がより際立つ

かたちになりました。  
 今回の発表は、春学期のインスタレーションを踏まえた発表です。教室全体を使って表現した、周りに溶け込むために普段表に出してある「嘘」の部分と、いつもは胸の奥にしまっている本音を表した「真実」の部分の対比を、前回と同じ「目」だけでなく、「耳」も使って、来場者に体感してもらいます。この作品を観賞することが、私たちが生きる社会について改めて考えるきっかけとなり、来場者の一人一人が、自分の生き方や他人との接し方について考え、見つめ直し、行動してもらうことができたら、私たちの未来はもう少し明るくなるのではないかと思います。

---

発表者：黒田悠歌

所属ゼミ：甲ゼミ

タイトル：パーソナル「香」診断  
 —ストレス社会で生きる私たちへ—

発表概要：

はじめに  
 私たちは国際文化情報学会で「香りを用いた心身、精神状態のコントロール」についての研究発表を行う。私たちの生活の中には数多くのストレスが存在しているが、そのストレスを軽減させる効果が香りにあるという可能性はないだろうか。道具による感覚・体験のデザインやこころの科学、五感共生論などの授業で「人は五感の中で視覚に最も重きを置く傾向がある」ということを学習したが、嗅覚は唯一脳に直接伝わる

感覚器であることから香りが人に対する心理的、生理的影響について視覚以上に期待できるのではないかという考えに至った。日常で思うようにいかない事や不安、焦りや緊張などをストレスと一言で表しているが、私たちが感じているものは様々な出来事や自身の体調など個人によって大きく異なるのではないかと考え、2019年11月14日に法政大学生68人に対してアンケートを実施した。実態調査の結果、77.9%の学生が通学の電車内で、72.1%の学生がアルバイト中に、55.9%の学生が工事の騒音にストレスを感じていることが分かった。他にもエレベーターやコンビニの待ち時間や構内移動など学生の日常から様々なストレスを見つけ出した。

就職して社会人になる前にストレスに対する向き合い方を見つけないかと思い、今回は研究の対象を大学生（法政大学生）に絞り質的研究を行うことにした。

先行研究

先行研究の論文から、香りが「ストレス」を軽減させる効果をもつという結果を得られてはいたが、私たちはその実験手順に疑問を持った。先行研究ではストレスを与えるための課題をいくつか設定してはいたが人それぞれ感じるストレスは異なり、その課題を熟す被験者の得意不得意に左右されて実験結果が変わってしまっているのではないかと考え、再検証の実施を試みる。

研究方法

1 無作為に選んだ被験者一人ひとりに

話を聞き、その人が日頃何にストレスを感じているかについて質的研究を行って調べる。(ストレスと述べても、通学時の満員電車に感じる不快感、対人関係により生じる緊張感、多忙さゆえのスケジュール管理の難しさ等とを感じるストレスが異なるため踏んでいるため。)

2 その被験者が感じる「ストレスを軽減させるための香り」を調べる為に、実際にストレスの要因となる出来事と同じ程度のストレスを感じられる課題を被験者個人に合わせて作成する。

3 作成したストレス課題を行なった前後で、被験者の主観的(感情的)変化と客観

的变化(脈拍数、脳波などの変化)を調べる。

最後に以上の個人を対象にした調査・実験を通じて得られた結果を、今回の研究の対象にならなかった皆様にもストレスと香りの実験を体験してもらい、香りがストレスに与える影響を考えてもらうことを目的にする。

#### 参考文献

グレープフルーツとベルガモットの香りがアナグラム課題に対する心理生理学的スト

レス反応に及ぼす影響

雑誌名：関西学院大学心理科学研究

著者：北田・華世・有光・興記

発行年：2019年3月25日

タイトル：男らしさ・女らしさはどこから来るのか

#### 発表概要：

岩川ゼミでは今年度のテーマとして『表象から読み取るジェンダー』を掲げ、クィア・スタディーズの基礎的な知識を学んだ後にメディア文化研究の観点からジェンダーを巡る諸問題について考える力を身に着けた。現在、あらゆる生活情報がメディアに依存し、必要不可欠になっている。しかし、メディアに登場するのは世の中に実在するよりはるかに「女っぽい女、男っぽい男」である。それを見た私たちは「男/女ってこうだよな」と拍車をかけて意識を堅固なものに構成していくのではないだろうか。岩川ゼミでは、近年のジェンダー観を意識して作られた作品を分析し、「男らしさ・女らしさはどこから来たのか」という疑問を持ち、生まれてから、周囲の社会環境によって女性イメージ・男性イメージが図らずとも形成されているのではないかと考えた。

今回の展示では、幼少期のおもちゃ・服から、メディア、教育まで様々な要因によって1人のジェンダー意識が形成されていることを体感してもらい「当たり前のように持っている自身のジェンダーアイデンティティはどこから来たのか」「〇〇らしさで片づけられてしまいがちなジェンダーバイアス」について疑問を投げかけることを目的とする。

胎動を感じさせるトンネルを抜け、鑑賞者が社会に“生まれる”と、はじ

発表者：浜野愛子

所属ゼミ：岩川ゼミ



めにあるのが乳幼児向けのおもちゃ等の展示である。「女の子はおままごとや人形」「男の子は車のおもちゃ」のように大人によって分類され、与えられたものに囲まれて生活していくことで、ジェンダー観が徐々に刷り込まれていく。また、制服・リクルートスーツ等を展示することで学校・社会から無意識に強制され“女子はスカート”というように男女がはっきりわけられてしまっていることを示す。

写真の展示では、幼少期は一見ただけでは男女の区別がつかなかった私たちが親や周りの大人たちによって、見た目を「男の子」「女の子」にさせられていたが、大人に近づくにつれ、その男らしさ・女らしさは曖昧さを増してきていることを表現した。

部屋の中央にはワイヤーでできた2体の人型オブジェが並ぶ。その身体を「男／女らしく」肉づけるように詰まったメディアの数々は普段私たちが目にするものばかりである。それらがもたらすイメージを規範に私たちは「男／女らしく」あるべきだと思ってしまうようになっていくのではないだろうか。

そして、最後には色とりどりの布が並ぶ。世間一般的に男は青、女は赤やピンクといった固定概念が存在し、それらの色がそれぞれの性別を表現する手段として用いられ、生まれた時から身体に合わせてこの二分化した色を与えられる。色とりどりの布には二分化できない色を、かろやかにまとう自由を持つという意味

をこめた。

作品を通じて鑑賞者が、自身が置かれている現状や、男らしさ・女らしさに捉われて生きているということ客観的に認識することで、より自由に・自分らしくいられるように願う。

---

発表者：金原あかり

所属ゼミ：稲垣ゼミ

タイトル：アートユニット「Sulata vesi」によるアートプロジェクトの再現制作

発表概要：

法政大学国際文化学部稲垣立男ゼミは、2019年8月に群馬県吾妻郡中之条町で行われた国際展「中之条ビエンナーレ 2019」1)に参加し、作品展

示を行った。私たちは、国際的アートユニットである「Sulata vesi」が「中之条ビエンナーレ 2015」で実施したアートプロジェクトについて調査し、彼らの実施したワークショップや制作した絵画、映像作品の再現制作を行った2)。

Sulata vesi について

中之条町では2007年より、国内外のアーティストと地域住民らが参加する「中之条ビエンナーレ」を開催している。私たちは作品制作のための調査で昨年度中之条に訪れた際にライラ・ユントゥネン・織田義理の共同作品に出会った。

彼らのユニット名である「Sulata vesi」はフィンランド語で「雪解け

水」という意味であり、ライラ・ユントゥネンは1981年ヘルシンキに生まれ、子どもの頃の様々な記憶や体験を基に、絵画作品や映像作品を制作している。織田義理は1970年に神戸に生まれ、ロサンゼルスにある Otis College of Art and Design にて写真を学んだ後、地域災害をテーマに世界各地で制作を続けている。

2010 頃から交流のあった二人は、「中之条ビエンナーレ 2015」へ参加するためにこのユニットを結成した。彼らは滞在中、雄大な山々に囲まれた地形やラムサール条約湿原、温泉郷、養蚕天蚕文化などの里山文化を特長にもつ中之条の風景や人々をテーマとしたアートプロジェクトを実施した。

制作のきっかけ

私たちが「Sulata vesi」の作品に興味を抱いたきっかけは以下の3つである。

1. 「Sulata vesi」は、フィンランド人と日本人による異なった文化的背景を持つアーティストによるユニットであること。
2. 地域コミュニティへの取材を基とした現代のパブリック・アートを志向しており、稲垣ゼミの活動と共通している。
3. SNS をきっかけにしているなど、結成の経緯が現代的でユニークであること。

再現制作されたワークショップ・作品

1. ライラによるワークショップ「KAWAII」での制作物。「カワイイ」を

テーマに、100円ショップの商品を素材とした作品を再現制作。

2. 織田による「同一性と差異」での映像作品。「KAWAII」同様、中之条の人々の参加によるワークショップである。

3. 織田が撮影した中之条の風景を基としたライラのドローイングを再現。

4. プロジェクトのアイデアやプロセスを書き出した黒板を再現。

1) <https://nakanojo-biennale.com> (2019.10.30)

2) インスタレーションなど、作品の残りにくい現代アートにおいて、再現制作は一般的である。例えば2014年に不慮の事故で急逝した國府理

作品《水中エンジン》の再現制作は、遠藤水城の呼びかけにより実施され

た。  
<https://engineinthewater.tumblr.com> (2019.10.30)

発表者：山本葉月

所属ゼミ：稲垣ゼミ

タイトル：「太陽の楽園」ソーシャリー・エンゲージド・アートに関する研究成果としてのインスタレーションの試作

発表概要：

稲垣ゼミは国際文化情報学会での発表を目標に、ソーシャリー・エンゲージド・アート（SEA）に関する研究を目的とした新たなアートプロジェクトを立ち上げた。その成果としてのインスタレーション作品「太陽

の楽園」は、新しい研究のための作品制作の試みである。

ソーシャリー・エンゲージド・アートは「アートワールドの閉じた領域から脱して、現実の世界に積極的に関わり、参加・対話のプロセスを通じて、人々の日常から既存の社会制度にいたるまで、何らかの「変革」をもたらすことを目的としたアーティストの活動を総称するものである。」(SEA リサーチラボ 2014) ソーシャリー・エンゲージド・アートは単なる芸術活動ではない。

アーティスト自ら人々の意識改革を訴えていくことで、より良い社会を目指す活動の総称である。制作過程では結果的に異文化を含む人々や場所、組織をもつないでいくことができるため、画期的なコミュニケーション方法ともいえるだろう。

私たちのゼミでは、これまでに国内外の地域コミュニティと数多くの共同のアートプロジェクトやワークショップを実施してきた1)。

コミュニケーションをテーマとしたこれらの実践は、ソーシャリー・エンゲージド・アートの方法を先駆的に準備してきたとも言えるだろう。

今回の研究において、改めてソーシャリー・エンゲージド・アートの概念を作品の制作過程に意識的に取り組むことで、これからの研究活動を一層豊かなものにしてゆきたい。

今回発表する私たちのインスタレーションは、ある社会的テーマに関連した様々な「表象」をブリコラージュのように寄せ集めることで、そのテーマを浮かび上がらせる試みであ

る。私たちの選んだある社会的なテーマは会場での作品体験を通じて、初めて「伝わる」だろう。

私たちはこの作品を通じてどのような課題を追求したのだろうか。是非会場を訪れてそれらを発見してほしい。注

1) 干溝博物館プロジェクト(越後妻有アートトリエンナーレ 2009)」、おやこで楽しむアート(アーカスプロジェクト、茨城県守谷市、2008-2011)、子どもアート会議(千代田学 2009-2011)、Doi Saket Museum Project(Compeung、タイ・チェンマイ、2007-)、高郷プロジェクト(森の方舟プロジェクト、福島県喜多方市 2013-) Sulata ves(中之条トリエンナーレ 2019、群馬県中之条町)など。

#### 参考文献

SEA リサーチラボ『SEA とは?』  
<http://searesearchlab.org/definition>  
(2019.11.11)

パブロ・エルゲラ著、アート&ソサイエティ研究センター SEA 研究会訳(2015)『

ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』フィルムアート社

アート&ソサイエティ研究センターSEA 研究会・トム・フィンケル  
パール・グラント

・ケスター・星野太・高山明・藤井光・カリィ・コンテ・ジャスティン・ジェスティ

(2018)『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的

転回をめぐる』フィルムアート社

発表者：園海人

所属ゼミ：大嶋ゼミ

タイトル：ジェスチャー制御による音響と映像を組み合わせたメディアアート製作

発表概要：

われわれは映像や音響を中心にメディアアート作品の制作および関連技術の研究を行っており、映像音響表現のためのデバイスの自作やソフトウェアの実装、レーザーカッターによるモノづくりなど活動範囲は多岐にわたっている。

今回の発表では Kinect と Leap Motion を用いて直接ハードウェアに触れずに映像と音響を制御するメディアアートの制作を目指す。実装環境としては、映像出力を Processing、音響出力を Pure Data により行っている。また、それぞれの機能単位相互の連携は Open Sound Protocol と呼ばれる通信プロトコル(以下 OSC)によって実装している。

本作品は大きく分けて 3 つの機能単位に分かれている。1 つ目は Kinect を用いたモーショントラッキング用のプログラム、2 つ目は Leap Motion を用いたコントローラ、3 つ目は音響出力を担う Pure Data を用いたプログラムである。

1 つ目のプログラムでは、人間の動きを検出するために、関節や腕、

胴体の位置情報を取得できる Kinect を用いている。Kinect は 2010 年に発売が開始されたモーションキャプチャ用のデバイスである。当初はゲーム機の一つである Xbox 360 の周辺機器として販売されていたが、2012 年には Windows コンピュータ上で利用可能な「Kinect for Windows」が発売されており、パソコン上でも深度センサーや、スケルトン認識等を活用することが可能となっている。本作品では、初期の Kinect である Kinect v1 を利用しており、腕の関節の位置をもとにアニメーション生成や音響に変化を与えることを実現している。

2 つ目のコントローラは、ボックス状の GUI を Leap Motion によって操作することで、映像と音響に変化を与える役割を担っている。Leap Motion とは、Leap Motion 社が開発したハンドトラッキング用デバイスであり、赤外線センサーと画像解析により手の部位の位置をかなり正確に認識することが可能である。前述したように Kinect でも人体の部位を検出することが可能であるが、Leap Motion と比較すると微細な範囲のデータ検出には不向きであるため、コントローラの制御には Leap Motion を利用している。

3 つ目のプログラムでは、Pure Data を用いて、音響の生成を行っている。Pure Data は GUI(Graphical User Interface)を用いてプログラムを制作できるビジュアルプログラミング言語の一種であり、直感的・視覚的な音響製作が可能となっている。本作品では Leap Motion を用いたコント

ローラからの情報や、Kinect により取得した手や関節などの位置情報の変化をもとに音響を生成する役割を担っており、作品全体の根幹となる部分となっている。

今回はモーションキャプチャ用デバイスである Leap Motion と Kinect を用いて、直接ハードウェアを操作することなく身体の動きによって映像と音響の制御を行っている。身体を動かし、自由に映像と音響の変化を楽しめることが本作品の利点であり、表現のための人体の動き検出には体幹と四肢によるジェスチャ検出を利用し、細かな演奏パラメータの制御には手指操作の検出を組み合わせることで実現していることが技術上の主張点である。

発表者：奥山香帆

所属ゼミ：粟飯原ゼミ

タイトル：希望船～アフリカの声をのせて～

発表概要：

2002 年に公開された映画『アマンドラ!』は、南アフリカの反アパルトヘイト闘争の歴史における音楽の役割と意味を探究した記録映画である。アフリカにおいて、音楽は第一に娯楽であり、文化の営みである。しかしそれはまた、しばしば政治的な活力となり、さまざまな人びとや声を束ねる連帯や抵抗の拠り所ともなる。いつの時代も、苦しみや痛みを表すとともに、夢と希望をはこんできた。

わたしたちは今回の発表で、そうした音楽の側面に目を向け、「パンアフリカニズム」を表現する歌の数々に注目する。

パンアフリカニズムとは、アフリカから奴隷貿易を通じてアメリカやカリブに連れられた人びとの子孫によって 19 世紀に生み出され、世界じゅうに散り散りになったアフリカの人びとをいわば一つの運命共同体としてとらえ、その解放と連帯を目指す思想＝運動である。1945 年以降のアフリカ大陸においては、独立運動に大きな弾みをもたらすことになった。アフリカ（系）のミュージシャンたちは、どのようにパンアフリカニズムの思想を汲み取り、表現してきたのだろうか。代表的な楽曲を複数とりあげて、その詞を読み解いてみる。

また、そもそもパンアフリカニズムが生まれるきっかけとなったのは、大西洋横断奴隷貿易であったことから、パンアフリカニズムについて思考することと奴隷貿易の痛ましい過去を見つめ直すことは不可分となる。わたしたちは、奴隷船をモチーフにしたインスタレーション作品（ロミュアルド・ハズメ、ドミニク・ジルクペなど）からヒントを得て、アフリカとアフリカの人びとを襲った非道な暴力の象徴としての奴隷船を、パンアフリカニズムの夢と希望をのせて未来へと航海し続ける「希望船」に転換するつもりである。「希望船」には、パンアフリカニズムをうたうミュージシャンたち、そしてその思想と運動を形づくり、実

践し、支えてきた人びとの無数の思いが詰まっていることだろう。3色のパンアフリカ・カラー——アフリカが流した血の赤、アフリカの植生を表す緑、アフリカの豊かさを象徴する黄——の彩りによって、その思いを立体的、視覚的にも強調したい。